

早稲田大学 文化構想学部 2014 年度ゼミ論文

「大学周辺地域で活動する学生団体の歩みとこれから」

文化構想学部

社会構築論系

浦野ゼミナール

学籍番号 1T100994-0

山田彬央

目 次

1 章	問題意識と論文の進め方	2
2 章	早稲田大学周辺地域と学生の関わりの歴史	3
3 章	早稲田大学周辺の商店街を中心としたまちづくりの動き	6
3-1	早稲田大学周辺商店連合会について	6
3-2	早稲田大学周辺地域でのまちづくり活動の活発化<1990年代~2000年代前半>	7
3-3	現在の地球感謝祭	8
4 章	早稲田大学周辺地域で活動する学生団体	9
4-1	先行研究の検討	9
4-2	まっちワークグループ早稲田の活動	10
4-3	アトム通貨実行委員会 早稲田・高田馬場支部事務局	19
4-4	学生環境 NPO 環境ロドリゲス	24
4-5	早稲田祭運営スタッフ	26
4-6	4章のまとめ	27
5 章	地域と学生の新たな繋がりを生む動き	30
5-1	取り組みが生まれた背景	30
5-2	アトム通貨学生事務局の「ヒトマチプロジェクト」	30
6 章	論文のまとめ	36
	参考文献リスト	38
	参考資料	41
	参考資料 1 商店街を中心に実施しているイベント	41
	参考資料 2 早稲田大学周辺地域に関する論文の要旨まとめ	43
	参考資料 3 早稲田のまちづくりを取り上げた記事	47
	参考資料 4 早稲田のまちづくりに関連する書籍・WEB ページ	53
	参考資料 5 年表	55

1章 問題意識と論文の進め方

<問題意識>

早稲田大学で過ごす中で、大学の休み期間中には飲食店が営業時間を短縮するのを見て、大学・学生の動きが地域に対して大きな影響を持っていることを感じてきた。また、大学周辺地域をフィールドとして活動する学生団体に加入していたことから、こうした学生団体の活動の変遷を整理し、早稲田大学周辺地域と学生団体の今後の関係を考えることとした。

<論文の進め方>

2章では、早稲田大学の学生と周辺地域との関わりの変遷を見ていき、3章では次の章からの学生団体の話をスムーズに進めるために、早稲田大学周辺地域の商店街についての紹介を行う。1990年代から2000年代前半まで盛んだった商店街を中心としたまちづくりの動きや、学生団体も参加する商店街のイベントなどを紹介する。

4章からは早稲田大学周辺地域で現在活動する団体の話に移る。学生団体まっちワークの事例を中心に、4つの学生団体の事例から、大学周辺地域を活動の場とする学生団体が地域との良好な関係を保ちながら活動を継続していくために必要なことを考える。

5章では、地域と学生団体の新たな繋がりを生み、それを継続させようとするアトム通貨学生事務局の取り組みに触れ、地域と学生団体の関係についての展望を述べる。

2章 早稲田大学周辺地域と学生の関わりの歴史

<東京専門学校設立以前>

現在の早稲田大学周辺地域は、江戸時代には、田畑や雑木林が広がる地域であった。早稲田村は茗荷の産地として知られており、徳川幕府が1828年に発行した「新編武蔵風土記稿」にも早稲田の茗荷が紹介されていた（JA 東京中央会「江戸・東京やさいマップ 早稲田ミョウガ」、2014年12月28日閲覧）。現在大隈庭園がある場所には、松平讃岐守の別邸があり、ここは後に大隈重信の別邸となった。

また、現在の早稲田大学9号館の辺りには、古くから水稻荷神社があった。水稻荷神社は、1830年代に書かれた『江戸名所図会』にも「高田稲荷」として記載されており、防火にご利益があることから消防関係者に特に親しまれていた。なお、水稻荷神社は、後に早稲田大学との土地交換により現在の西早稲田3丁目に場所を移すことになる（水稻荷神社「神社のご案内」、2014年12月28日閲覧）。

<東京専門学校設立>

東京専門学校の校舎は、大隈重信別邸の西側の丘陵に建設された。この場所は、現在早稲田大学早稲田キャンパスとなっている。まずは、現在の高田早苗記念図書館の場所に講堂と2棟の寄宿舎が建てられた。大隈のブレインであった小野梓を中心に設立準備が進められ、1882年10月に開校式が行われた。開校当時の学科は、政治経済学科、法律学科、理学科の三学科と、希望する学生が兼修できる英学科から成り、78名の学生が入学した。東京専門学校開校設立後も、しばらくは校舎の周りにはまだ田畑や雑木林が広がっていた。

東京専門学校は、地方から上京してきた学生を、学内に設置した寄宿舎に寄宿させていた。しかし、学生数が増えるにつれ寄宿舎の収容人数が足りなくなってきた。そこで、東京専門学校から早稲田大学に名称を変えた際に、寄宿舎の建て直しを行った。1903年、現在の鶴巻小学校がある土地を借り入れ、敷地2085坪、収容人数200人の寄宿舎を建設した。さらに、隣接する土地にも50人収容のものが建てられた（島善高, 2008, pp78-80）。

<関東大震災後>

1928年時点で、早稲田大学には毎日約1万5000人の学生が通うようになっていた。戦前のこの時期まで、早稲田大学の学生が集まる、学生街の中心は鶴巻町であった。鶴巻通りには食堂、喫茶店、古本屋、文房具屋などが並んでおり、通りの裏には下宿が立ち並んでいた（佐藤能丸, 1991, p.422）。1920年頃から1940年頃までが早稲田の下宿街の最盛期であり、鶴巻町の他にも、グラント坂や馬場下町方面など、早稲田大学を囲むように下宿があった。1936年の時点で、早稲田大学周辺には4つの下宿業組合が存在しており、組合に加入している下宿の総部屋数は5100ほどであった。この他にも組合に加入していない下宿があり、合わせると、早稲田大学の半径2キロメートル以内には約6000室分の下宿が存

在していた（佐藤能丸, 1991, pp426-429）。また 1927 年には、現在まで早稲田大学とその周辺地域のシンボルとして残る大隈記念講堂が完成した。

<戦後の学生街>

1945 年の大空襲を受けて、早稲田大学周辺地域も東京の他地域と同じく壊滅的な状態となった。大学西側の一部の地域を残して焼野原と化し、いままで早稲田に形成されていた学生街は消滅してしまった。学生街の中心地であった鶴巻通りも焼失し、正門から伸びる通りは何もない荒地となってしまった。また、早稲田大学の校舎に関しても、その 3 分の 1 を焼失した。この後は、大学に通学する学生の多くが大学西側の戸塚通り（現在の早稲田通り）を使うようになった（佐藤能丸, 1991, pp457-459）。

<地下鉄東西線の開通>

1962 年、国鉄中野－東陽町間を結ぶ営団地下鉄東西線の建設工事が始まり、1964 年には早稲田・神楽坂・飯田橋の 3 駅が設置され、早稲田－九段下間での営業が開始された。東西線の開通によって、高田馬場駅から早稲田大学まで徒歩で通う学生は激減した。教職員の大半も東西線の早稲田駅を利用するようになった。さらに、地下鉄によって通学が楽になったため、大学近辺に下宿する学生も減少していった（佐藤能丸, 2003, p. 232）。⁴

<周辺商店街の最盛期>

2001 年に行われた先行研究によると、早稲田大学周辺の商店主が「周辺地域が一番盛んだった」と感じていたのは、1970 年代であった（41.3%が「1970 年代」と回答）。これを裏付けるように、大学周辺地域において、雀荘などのレクリエーション施設、下宿等の宿泊施設、飲食施設、本屋・文房具屋等が 1980 年頃を境に減少していた。また、自宅から大学に通学する学生の割合の上昇、23 区外から通学する割合の上昇、といったデータから自宅通学者・遠距離通学者の増加が見られた。このことは、大学周辺地域に居住して通学する学生の減少を示唆している。また、早稲田大学の学生の総数はあまり変わっていないにも関わらず、商店主の多くが「学生数が減少している」と感じており、学生が大学周辺商店街で過ごす時間が減少していったのではないかと考えられる（李彰浩ら, 2001, pp. 175-182）。

<学生会館の建設と学内施設の充実>

1954 年、早稲田大学南門の筋向かいにあった土地に、早稲田大学の第一学生会館が建てられた。学生数が増加したこともあり、学生の休憩・談話の場づくりと、大学公認のサークル「学生の会」の部室を一箇所にとめることを目的として建設された（早稲田大学大学史編集所, 1992, p. 1125）。1965 年に第二学生会館が建てられた場所も第一学生会館の近

くであり、学生の課外活動の中心地はこの一帯であったと言って良いだろう。

2001年になると、戸山キャンパス隣に新しく建設された新学生会館への移転が行われ、第一・第二学生会館は取り壊された。新学生会館は、以前の学生会館よりも大幅に広く設備の整った施設であり、学生の課外活動の中心地は商店街のあるエリアから遠ざかった（早稲田の街・わせまちドットコム「早稲田のまちづくり・学生との連携」、2014年1月5日閲覧）。

新学生会館の建物内にはセブン-イレブンが入っており、2009年度には早稲田キャンパス内にファミリーマートが開店した。このように大学構内の学生向け設備は、年々充実してきた。このことに関して、W商連会長へのヒアリングによれば、「大学構内の居心地がどんどん良くなっていて、学生が外に出てこなくなっているように感じる。学内にコンビニができたり、学内で無料で印刷ができたりする。大学の中だけで学生が色々できるようになっている」と感じているということであった。

3章 早稲田大学周辺の商店街を中心としたまちづくりの動き

3-1 早稲田大学周辺商店連合会について

早稲田大学の周辺には現在、下の図のような7つの商店会（大隈通り商店会、ワセダ商店会、早大南門通り商店会、早大西門通り商店会、ワセダグランド商店会、早稲田駅前商店会、早大通り商栄会）と1つの古書店街連合会がある。これらは、1982年から早稲田大学周辺商店連合会（以下、W商連と呼ぶ）という組織を結成している。早稲田大学と周辺の商店街との話し合いは、W商連を窓口として一括して行われており、毎年2回、W商連と早稲田大学総務部との事業報告・意見交換の場が設けられている。また、W商連は毎月1回、各商店会の役員が集まる会合を開いているほか、W商連単位でイベントの実施などに取組むことも多い。

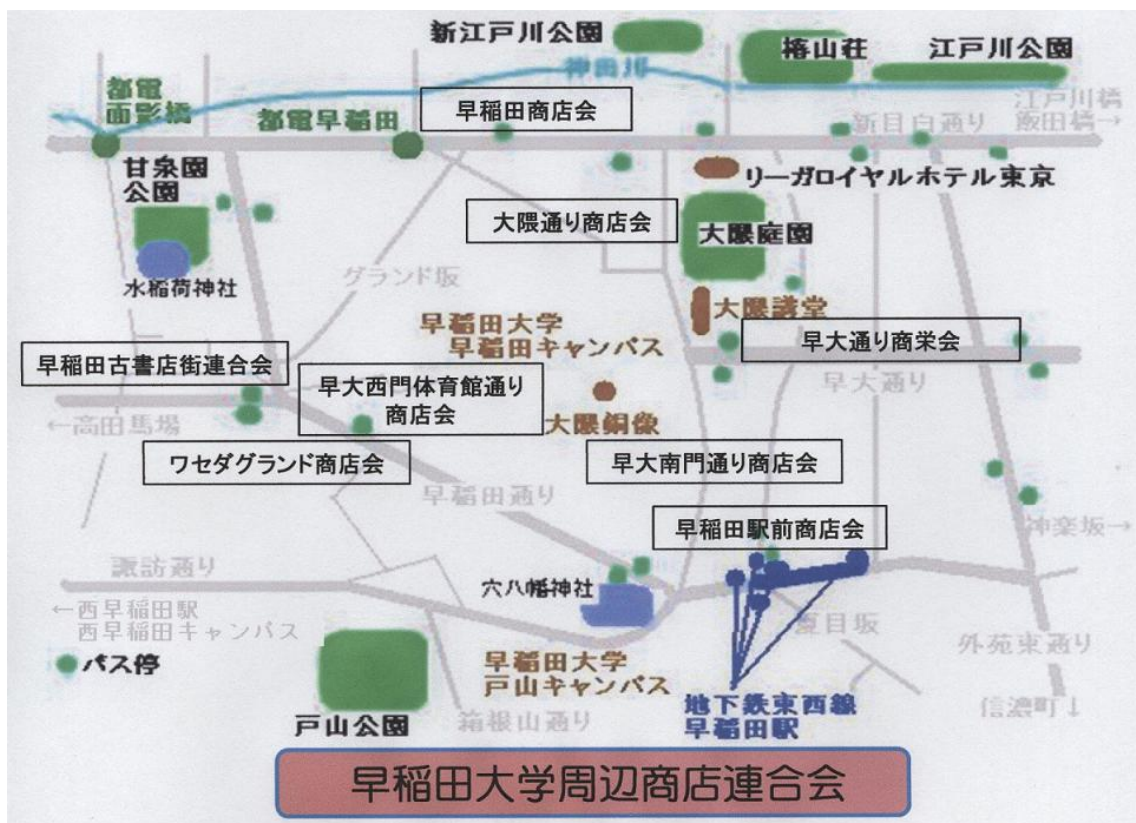


図 3-1 早稲田大学周辺商店連合会周辺図

(早稲田の街・わせまちドットコム「早稲田商店街の紹介」, 2014年1月5日閲覧)

3-2 早稲田大学周辺地域でのまちづくり活動の活発化

<1990年代～2000年代前半>

1990年代になると、早稲田大学周辺地域の商店街を中心とした「いのちのまちづくり実行委員会」によるまちづくりの動きが活発に行われた。この時期のまちづくりの取り組みは、早稲田大学周辺地域で活動する学生団体の設立のきっかけとなっていたり、学生団体と地域との現在まで続く接点となっていたりするため、ここで紹介することとする。

「いのちのまちづくり実行委員会」が発足するきっかけとなったのは、1996年に実施された「エコ・サマーフェスティバル・イン早稲田」というイベントであった。これは、学生が地域からいなくなる夏休みの時期に何かイベントをやろうという所から企画し始めたものであった。当時早稲田商店会の会長であった安井潤一郎氏が、早稲田大学と交渉してキャンパスを貸してもらう約束をとりつけ、「環境」とつけておけば人が集まるのではないかという理由から、イベントのサブタイトルに環境という文字をつけることになった。環境という名前をつけたからにはゴミを出さないイベントにしようと考え、行政やリサイクル関連機器メーカー、早稲田大学職員等と協力し、ゴミをほとんど出さないイベントを実施することに成功する（早稲田いのちのまちづくり実行委員会, 1998, pp. 12-19）。

エコ・サマーフェスティバルで始まった早稲田での環境をテーマにした取り組みは、エコ・サマーフェスティバル終了後も続き、1996年11月には商店街での買い物促進とリサイクルの促進を組み合わせた取り組みも行われた。この一連の取り組みに関わってきたメンバー達が、「環境」に限定されない様々な分野でまちづくりを推進していくために、1996年12月、早稲田いのちのまちづくり実行委員会が発足した。実行委員会には商店街のリーダー達、大学教授、行政職員、企業、学生などが参加しており、実行委員長は安井氏が務めた。早稲田いのちのまちづくり実行委員会では、「リサイクル」、「バリアフリー」、「震災」、「インターネット」、「地域教育」、「元気なお店」という6つのテーマからまちづくりに取り組むこととなった。

いのちのまちづくりの動きの中で、特に注目された取り組みの一つに1998年に設置された「エコステーション」があった。これは、商店街の空き店舗を利用してリサイクル用の回収機を置くというもので、空き缶やペットボトルなどを持ってきた人に、商店街で利用できる割引券等が当たる仕組みであった。バリアフリーに関する取り組みは、当時早稲田大学の学生であった乙武洋匡氏を中心に行われていた。ここでの取り組みの一つとして、「車椅子探検隊」という地域の子供達に車椅子を体験してもらう企画を継続的に実施していた。また、早稲田大学構内のバリアフリー化を提言し、それが大学構内にスロープ等を設置することに繋がるといった成果もあった。

こうして様々な分野の取り組みが生まれるのと並行して、エコ・サマーフェスティバルも、大学の夏季休業期間に毎年実施された。2000年以降は、高齢化社会について考える「エ

イジングメッセ」というイベントと合同で開催されるようになり、これ以降「地球感謝祭」という名称に変わった。その後、早稲田大学周辺地域でのまちづくり活動が「いのちのまちづくり」という枠組みで行われることはなくなったが、そこで生まれたいくつかの取り組みは2014年現在まで継続しており、地球感謝祭もその一つである。そして現在、学生団体と早稲田大学周辺地域との主要な接点の一つともなっている。

3-3 現在の地球感謝祭

地球感謝祭は、W 商連が新宿区の後援のもと、早稲田大学早稲田キャンパスを借りて毎年9月に開催するイベントである。来場者は3万人程度、参加団体数は70程度で、早稲田の商店会が主催するイベントの中では一番規模が大きいものである。

大学キャンパス内に全国各地の物産展や地元商店街の模擬店が出るほか、屋外の特設ステージでは市民団体や学生団体のパフォーマンスが行われ、大学の建物内では、防災やエコなどをテーマにした企画（講演会、展示等）が実施される。パフォーマンスや展示を実施する側として学生が多く参加するほか、イベントの会場設営や飲食店の容器の手配など、運営面にも多くの学生団体が協力している。もともとは「エコ」から始まった地球感謝祭であるが、現在は環境分野以外の取り組みも行っている。「早稲田地球感謝祭2014 企画概要」（早稲田地球感謝祭実行委員会ら、2014）から現在の地球感謝祭の目的・企画趣旨を引用する。

・目的

イベントの準備・開催を通じながら早稲田の街で人が出会い、関わることによって、人と街が賑わい・元気になること「早稲田の街の元気づくり・活性化」を目的として開催します。イベント当日の賑わい以上に、イベントを通じて早稲田の街の日常に様々な活力が注がれることを目指します。

・企画趣旨

早稲田大学周辺の商店街振興につなげる、社会的な取り組みを通じて早稲田から広く社会へ発信する、早稲田に関わる全ての人々が交流し合うといった方向性のもとで、参加者一人ひとりが、やりたいことを実現し、自ら楽しむことを第一としていきます。環境、防災、芸術・文化、食、世代間交流、地域間交流などの視点から、早稲田の街を様々な切り口で盛り上げます。

4 章 早稲田大学周辺地域で活動する学生団体

4-1 先行研究の検討

この章では、3章で述べた地球感謝祭の運営に継続的に関わってきた学生団体を取り上げ、それぞれの活動内容について詳しく述べる。

それに先立ち、本論文と関連の深い、内田らの先行研究（内田ら、2008）について紹介する。なお、この先行研究の要約は「参考資料 2」の中に掲載している。

内田らは、2007年度までの学生団体と地域住民の関係性の変遷と、学生団体の活動の継続性について論じているが、学生団体の一番の特徴ともいえるメンバーの代替わりによる影響については、ほとんど考慮されていない。また、学生団体に対して行われたヒアリング結果に関しては、学生団体名を伏せ、複数の学生団体の意見をまとめて扱っている。このため、個々の学生団体の活動目的の違いや、組織形態の違い、取り組みの具体的内容に踏み込んだ分析は行われていない。

また、先行研究では、学生団体の活動の継続性が担保されていない原因を、地域と学生との関係性の変遷によるものだとしていた（内田ら、2008, p. 239）。関係性の変遷とは、「組織化とともに地域と学生の間をつなぐ窓口が明確になり、学生と地域との繋がりが各地で多発している。しかし、地域と学生との関係は当初の『人間付き合い』的な関係性から、『組織対組織の付き合い』へと変化し、イベント後には交流が途絶える事も多くなり、早稲田自体から離れる学生も生じてきている」ということを指している（内田ら、2008, p. 239）。

たしかに、地域のある人物と特定の学生との間に人間付き合い的な関係があれば、その学生との交流がイベント後すぐに途絶えるということはないだろう。しかし、基本的に大学生は4年で卒業するものであり、それよりも長いスパンで学生団体の活動を継続させるためには、組織的に継続させるしかないと考える。

先行研究では2007年度までの課題の分析、解決策の提案をもって論文が終わっているので、本論文では2008年度から現在までに起こった変化を含め、学生団体の活動について述べる。

4-2 まっちワークグループ早稲田の活動

4-2-1 創設期から 2008 年度までのまっちワークについて

まっちワークグループ早稲田(以下、まっちワークと呼ぶ)は、「いのちのまちづくり実行委員会」から派生する形で生まれたサークルである。1999年、いのちのまちづくり実行委員会に個人的に参加していた早稲田大学の学生が、「いのちのまちづくり実行委員会学生部」を創設した。この学生部を創設した理由について、創設者の学生の言葉を以下に引用する。

これまで(1996年夏~1998年)の活動を通じ、地域に関わること、地域の中で活動すること、とりわけ“早稲田”という“学生のまち”に関わることで、その人の人間的・社会的な魅力を高める。学生時代にその体験をする必要性を強く感じ、多くの学生に地域、まちとつながりをもつ、そして参加するきっかけをつくりたかった(まっちワークグループ早稲田’99-2000「まっちワーク誕生物語」, 2014年1月5日閲覧)

(早稲田祭も行われていないこの時期に)乙武さんも自分も離れば早稲田のまちの活動に関わる学生がいなくなるので、そんな早稲田になってしまっただけは情けない、自分が何とかやらねば(まっちワークグループ早稲田’99-2000「まっちワーク誕生物語」, 2014年1月5日閲覧)

この言葉から分かるように、まっちワークは「環境」や「防災」といった特定のテーマに取り組むために設立された団体ではなく、90年代に入り活発化していた早稲田大学周辺地域のまちづくりの動きに参加していた学生が、より多くの学生に地域との接点を持ってもらおうと考えて設立した団体である。

いのちのまちづくり実行委員会学生部として1年間活動した後、学生部はサークルとして実行委員会から独立し、まっちワークグループ早稲田という名称で活動するようになった。実行委員会から独立した理由は、「いのちのまちづくり」という名前が付いていると、どうしても枠を意識して活動してしまうからであった。自分達の視点で考えたこと、やってみたいことを地域の中でどんどん実行していこうという思いから、学生サークルという形での活動を始めた(まっちワークグループ早稲田’99-2000「まっちワーク誕生物語」, 2014年1月5日閲覧)。まっちワーク設立初年度である2000年度の主な活動は、以下のようなものであった。

- ・車椅子たんけん隊の実施（計3回実施）
- ・早稲田大学周辺のタウンマップ「まっちウォーク」の作成
- ・修学旅行生に早稲田の街を紹介
- ・エコ・サマーフェスティバル運営の手伝い
- ・エコステーションの掃除
- ・西早稲田子供天国の手伝い
- ・都電荒川線沿線の商店会との交流

車椅子たんけん隊は乙武氏の活動を引き継いだものであり、エコステーションや修学旅行生の案内も、いのちのまちづくり実行委員会から生まれたものであった。このようにまっちワークは、いのちのまちづくり実行委員会から始まった活動を引き継ぎ続け実施していた。サークルになってからの新たな取り組みとしては、早稲田大学周辺のタウンマップ「まっちウォーク」を作成した。これは、W 商連の全加盟店の店名を掲載したもので、年度末に完成したこのマップは2001年度の早稲田大学全新生に配布された。

<2001年度>

サークルとなって2年目の2001年度には、その後まっちワークの主要な活動となるものが二つ始まった。一つ目は、タウン誌「わせねっと」の発行である。「わせねっと」創刊号の内容は、商店街の店主へのインタビューやオススメ店の紹介、都電に関する記事、地球感謝祭等の地域イベントの告知であった。「わせねっと」の創刊号は4ページしかない簡単なものであったが、早稲田大学構内や商店街に置かれたほか、近隣小中学校への配布も行った（まっちワークグループ早稲田'99-2000「わせねっと」, 2014年1月5日閲覧）。

2001年度に始まったもう一つの活動は、「防災キャンプ」であった。これは、まっちワークに防災に関心のあるメンバーが加入したことがきっかけで始まった。近隣の小学校の体育館を借りて、小学生を対象に1泊2日の避難所体験をしてみようという企画であり、早稲田大学周辺地域の小学校に募集をかけて参加者を集めた（まっちワークグループ早稲田'99-2000「防災キャンプ」, 2014年1月5日閲覧）。防災キャンプは、2008年度まで毎年継続して行われる、まっちワークの主要な取り組みとなった。

サークルの活動について定めた「まっちワークグループ早稲田規約」が制定されたのも2001年度のことであった。この規約によってまっちワークの活動目的と活動内容が明文化されることとなった。活動目的に関しては、いのちのまちづくり実行委員会学生部の創設時から、まちと学生の繋がりのために活動するという点は変わらなかった。活動内容に関しては、「プロジェクトの立ち上げ」とあることにより、活動目的に反しなければあらゆる

活動ができるため、実質的には規約によって活動内容が縛られることはほとんどなかったといえる。以下、「まっちワークグループ早稲田規約」(まっちワークグループ早稲田, 2001)からの引用である。

(3)この団体は次の目的のために活動する

- ・「まち」と「学生」の接点を深める
- ・学生なりのまちづくりの実践
- ・地域の活動に参加しようとする学生・住民のサポート

(4)この団体は前条の目的を達するために次の活動を実施する

- ・まちのイベントへの参加と協力
- ・まちづくりの視点に立ったプロジェクトの立ち上げ
- ・他の地域でまちづくり活動に関わる学生とのネットワークづくり

<2002年度～2006年度>

2002年度以降、タウン誌「わせねっと」は年4回発行されるようになり、防災キャンプとともにまっちワークの主要な活動となっていった。2003年～2006年の時期に関しては、詳細な活動内容を把握することができなかったが、防災キャンプと「わせねっと」が継続して実施されていたことは確認できた。

<2007年度～2008年度>

2007年度～2008年度にかけてのまっちワークの取り組みは、防災キャンプと「わせねっと」の発行が中心であった。この2つを継続させながら、あとは商店街等の主催するイベントを手伝っていた。

4-2-2 2009年度以降のまっちワークについて

まっちワークは、2009年度に実働メンバーが2人にまで減少し、存続の危機を迎える。この時期から2013年度までのまっちワークの活動を、まっちワークのメンバーへのヒアリングをもとにして、詳細に見ていく。

<2009年度>

まっちワークのメンバーは、2009年度5月の時点で実働メンバー2人にまで減少してし

まう。数ヶ月後に新メンバーが加入し、忙しくて活動に参加していなかったメンバーが復帰したことで、実働 5 名となるが、これ以上は人数が増えず、2009 年度いっぱい実質 5 名で活動していた。実働人数が 2 名となった時期に途切れた活動がいくつかある。

一つは、タウン誌「わせネット」の廃刊である。2001 年度に作成開始し、2002 年度からは毎年 4 回（春夏秋冬）発行していたわせネットは、2008 年度を最後に廃刊となった。2 人になった時点でフリーペーパーを作るのは難しくなり、人数が多少増えても、フリーペーパー作りに興味のあるメンバーがいなくなっていたため、その後復活することはなかった。

もう一つは、「防災キャンプ」である。2001 年度に初めて実施されたこの取組は、2008 年度まで毎年まっちワーク主体で行われていた。しかし、サークルの実働メンバーが減ったことで、まっちワーク主導でこの取り組みを続けていくことは難しくなり、防災をテーマに活動する学生団体「早稲田レスキュー」に活動を引き継いでもらおうとした。2009 年度は、引き継ぎのためにまっちワークと早稲田レスキューの共同実施という形で行うこととなっていたが、防災キャンプに参加する小学生を十分に集めることができずに未実施となり、そのまま途絶えることとなった。防災キャンプもメンバー増加後に復活することはなかったが、これも一度途絶えた活動を再開するほど、メンバーの「防災」に対する関心が高くなかったからであった。

2009 年度のまっちワークの活動目標は、とにかくメンバーを増やすことであった。サークル活動に参加できるメンバーが増えないことには、地域イベントの手伝いも十分に行えないし、次の年度にサークルが消滅してしまう可能性もある。したがって、メンバーを増やすために今後サークルの活動をどのような方向性で行っていくべきかという話し合いが頻繁に行われていた。

サークルの方向性について話し合いを進める中で、いままでの活動を続けるだけでは新メンバーが入らず、サークルが消滅してしまうのではないかと考えたメンバーが、商店街の手伝いを活動の中心にするのではなく、自分達主体で企画を実施することを中心として活動すべきではないかと提案した。この提案を受けて、自分達で企画を運営することを活動の中心とするサークルとなることが、「規約」に違反しないかどうかという話し合いが行われた。その結果、このサークルの変化は規約に違反するものではないと判断し、賛成多数で企画運営中心のサークルに路線変更することとなった。以下、2001 年 12 月 15 日に制定された「まっちワークグループ早稲田規約」（まっちワークグループ早稲田, 2001）から、関係する部分を引用する。

(3)この団体は次の目的のために活動する

- ・「まち」と「学生」の接点を深める
- ・学生なりのまちづくりの実践

- ・地域の活動に参加しようとする学生・住民のサポート

(4)この団体は前条の目的を達するために次の活動を実施する

- ・まちのイベントへの参加と協力
- ・まちづくりの視点に立ったプロジェクトの立ち上げ
- ・他の地域でまちづくり活動に関わる学生とのネットワークづくり

(18)この団体は(3)で定めた活動の目的達成のために、必要に応じてプロジェクトを立ち上げることができる

(19)プロジェクトは企画運営・学習会などを実施する

(20)プロジェクトはサークルメンバー及びその関係者によって構成され、リーダーを置くことができる。リーダーはプロジェクト活動に対して責任を持つ

この時期のまちワークにおいて、地域との接点は地球感謝祭を通したものが一番大きかった。地球感謝祭は毎年 9 月に開催されているが、その年のテーマを何にするかといった話し合いは、2 月頃から始まる。2009 年度まで、まちワークは地球感謝祭の話し合いに序盤から参加しており、そこで出会う商店会の役員や地球感謝祭運営の中心メンバーとの繋がりが、商店街との繋がりの基盤であった。商店街に加えて、毎年防災キャンプを実施していたことで戸塚第一小学校との間にも繋がりがあったが、2009 年度以降防災キャンプの実施が途絶えたため、小学校との関係はなくなってしまった。

<2010 年度>

2009 年に実働メンバーが 5 名となってしまったまちワークは、2010 年度に新メンバーが加入しなければサークルを廃止する予定であったが、2010 年度の新入生勧誘で数名のメンバーが新たに加入し、サークルを存続させることとなった。

まちワークが、自主的なイベント企画・運営を活動の主軸とすることに決めた後、最初に実施されたのが、「Waseda Artwork Project」という企画であった。これは、早稲田大学公認サークルである美術研究創作会にまちワークが声を掛け、大学周辺のいくつかの店舗で、一定期間学生の作品の展覧会を行ってもらおうという企画であった。

3 月の春休みには、「第一回企画会議」が行われた。これは、サークルのメンバーがいくつかの班に分かれて 1 ヶ月かけて企画案を練ってプレゼンし、実現できそうなものを実施するというものであった。このように 2010 年度からは、自分達で定期的にイベントを企画するための制度ができていった。

サークルの活動方針を変えていくにあたって、今まで手伝っていた商店会からの頼み事を断る場合がでてきた。いままでは、商店会からの頼み事は基本的に断らないようにしていたが、この時期から内容によっては断ることもでてきた。当時のメンバーによると、自分達で企画を考え実施するサークルとして少ないメンバーで再スタートするために、商店会の手伝いは今までよりも抑えようと考えていたという。

<2011 年度の活動>

サークルの活動の方向性が変わって 2 年目の 2011 年度には、営業中の商店街店舗内で学生音楽サークルの演奏会を行うイベントや、お寺の境内を借りたフリーマーケット等を実施している。こうしたイベントは、前年度から始まった長期休み中の企画会議を通して提案されたものであった。まっちワークは 2011 年度、年間を通して 3 つの企画を商店街で実施したが、この 3 つは全て南門商店街において実施された。またこの年の文化祭での出し物も南門商店街を紹介するという内容であった。このように、この時期は自分達主体の取り組みを行うフィールドには偏りが見られた。早稲田地域の特定の商店街の店舗と関わることが多くなっていたのは、サークルの一部のメンバーが南門商店街の店主と個人的に親しくなっていたことの影響が大きいと思われる。例えば、2011 年 6 月から 7 月に実施された店内で音楽サークルの演奏会を行うイベントは、あるメンバーと店主との雑談の中から実現したものであった。

2011 年度からは、まっちワークの地球感謝祭への関わり方がやや変わった。前年度までは、「まちの文化祭」という地球感謝祭の中の 1 コーナーを担当していたのに加えて、サークルの代表（1 名）が地球感謝祭の本部（事務局）に参加することが恒例となっていたが、2011 年度からサークル代表の事務局への参加がなくなった。「まちの文化祭」コーナーや、地球感謝祭の前日に行われる会場設営等は、今までと変りなく手伝っていたものの、まっちワークの地球感謝祭運営への貢献度は 2011 年度の時点でやや小さくなっていったといえる。

<2012 年度 春から秋までの活動>

2012 年度のまっちワークの活動は 2011 年度の路線を引き継いでいた。活動の中心は自分達で案を出したイベントを地域で実施することで、そのほかに地球感謝祭やファミリービンゴ大会等の商店会主催イベントの手伝いを行っていた。2012 年度にまっちワーク主催のイベントを実施するにあたっては、南門商店街 5 箇所、大隈通り商店街 1 箇所、ワセダグランド商店街 1 箇所に協力を求めた。

まっちワークは、2012 年度の地球感謝祭では、前年度と同様に、地球感謝祭内の「まちの文化祭」コーナー全般と会場設営を担当している。また、西門商店会の抽選会やファミリービンゴ大会、早稲田子供天国などの、まっちワークが毎年手伝ってきたイベントにも、今まで通りの形で参加していた。この時期になって、「まっちワークが最近何をやっているのかよくわからない」という声が W 商連から出てくるようになった。まっちワークの W 商

連各商店会のイベントや地球感謝祭でのスタンスは、頼まれたら手伝うというスタンスであって、受け身な状態であった。

<2012年度秋の代替わりからの活動>

2012年度秋にサークルの幹部交代が行われ、代表・副代表・会計等の引き継ぎが行われた。この代替わりを機に、まっちワークは再びサークルの運営方針を転換することとなった。この時期のまっちワークは「街からの信頼回復」ということを目標の一つとして活動することに決めていた。このような方針をとったのは、「街からの信頼が失われている」とメンバーが感じたことからであった。ここでいう「街」とは、個別の店舗ではなく、商店会全体のことを念頭に置いていた。前に述べたように、「最近まっちワークが何をやっているのかよく分からない」という声もあった。そこで、まっちワークは商店会主催のイベントにも自分達から積極的に参加していこうと考えた。

この方針のもと、まっちワークは、地域との関わり方を意識的に変化させていった。2012年の秋から、まっちワークはW商連の毎月一度の会合に参加するようになった。この会合は、W商連会長、副会長とW商連に加盟する各商店会の会長が集まる場である。まっちワークがW商連の会合に参加するようになったのは、前述の目標「街からの信頼回復」を達成するためであった。W商連の会合には各商店会の役員が参加するので、早稲田大学周辺地域の商店にまっちワークの現在の活動方針を知ってもらう上で最適だった。商店街のイベント実施予定等の情報を、広く早く入手できるようになることも、商店街イベントへの積極的参加をするのに役立った。また、W商連の会合で各商店会の役員に顔を見せること自体に意義があると考えていた。まっちワークからは毎月2名がW商連の会合に参加し、サークル活動の報告を行うようになった。

このようにW商連との定期的な接点を確保した結果、まっちワークとW商連との関係はしだいに良くなり、まっちワークの最近の活動にも興味を持ってもらえるようになった。2011年の地球感謝祭実行委員会の会議に参加していたメンバーは、2012年秋以降の商店会の会議に参加した際に、以前よりもフランクに接してもらえるようになったと感じたという。地球感謝祭実行委員長を務めた商店主に、「最近商店会の集まりに出てきてくれるようになって嬉しい」と言われたこともあった。いままで商店会役員からまっちワークに連絡事項がある場合、店主がメンバーと店で直接会った時や、メンバーのメールアドレスにメールで連絡したりすることが多かったが、W商連の会合に参加するようになってからは、W商連会合の場で頼み事をされることも増えた。

また、まっちワークが2012年度から新たに関わりだしたのが、早稲田大学の講義「気仙沼復興塾」から生まれた取り組みである「早稲田かつお祭り」である。まっちワークは商店主から声をかけられたのをきっかけに、早稲田かつお祭りの手伝いを行うようになった。2012年度のまっちワークは、かつお祭りの運営会議への出席や、オープニングイベントやフィナーレイベントでの会場準備・模擬店運営、twitterでの広報への協力といった形で早

稲田かつお祭りに参加した。

<2013年度以降の活動>

2013年度のまっちワークは、前年度秋に定めた「商店街のイベントにも積極的に参加する」という方針を引き継ぎ、商店会主催イベントにも主体的に参加するよう心がけていた。例えば、2013年度の地球感謝祭では、新たに「模擬店グランプリ」という取り組みを行うことをまっちワークから提案し、その準備と地球感謝祭当日の模擬店グランプリ運営を行った。まっちワークが地球感謝祭の場で、会場設営や運営面での手伝い以外の自主的な取り組みを実施したのは、2008年以來のことであった。また、西早稲田子供天国等の地球感謝祭以外の商店会主催イベントにも、より主体的に参加するようになった。

2013年度にアトム通貨早稲田・高田馬場支部事務局を運営する学生による、「ヒトマチプロジェクト」が企画され、アトム通貨からの誘いを受けたまっちワークも、このプロジェクトに参加することとなった。ヒトマチプロジェクトについては5章で詳しく述べるが、学生団体と地域との継続的なネットワークを作り、複数団体が協働で地域での取り組みを実施することを狙うプロジェクトである。担当者2人がヒトマチプロジェクトの意見交換会やシンポジウムに毎回参加するという形をとった。ヒトマチプロジェクトの一環として行われた南門商店街にある宝泉寺での「てらこや」には、まっちワークもサークルとしてブースを出展した。ヒトマチプロジェクトを通じた新しい繋がりも生まれており、2014年度にはヒトマチプロジェクトで知り合った国際協力NGO シャプラニールに声を掛け、まっちワーク主催のフリーマーケットイベントに参加してもらった。

4-2-3 代替わりによる活動内容の変遷

<代替わりによるメンバーの興味の変化>

前述のように、まっちワークの前身である「いのちのまちづくり実行委員会学生部」が設立された理由は、90年代の早稲田大学周辺地域におけるまちづくり活動に個人的に参加していた学生が、「多くの学生に地域、まちとのつながりをもつ、そして参加するきっかけをつくりたかった」¹¹と考えたからであった。こうしてできた学生部は、乙武氏を中心に行われていた活動を引き継いだり、いのちのまちづくり実行委員会主催イベントの手伝いをしたりと、「いのちのまちづくり」の枠組みの中で活動していた。

1年後、「いのちのまちづくり」の枠にとらわれず、「自分たちがやってみたいことをまちの中、地域の中でどんどんやっっていこう」（まっちワークグループ早稲田'99-2000「まっちワーク誕生物語」, 2014年1月5日閲覧）と考えた命のまちづくり実行委員会学生部のメンバーは、実行委員会から独立して大学公認サークルとなる。大学公認サークルとなった後も、エコステーションでの取り組みへの協力等、「いのちのまちづくり」関連の手伝い

は継続的に行っていたが、それに加えて「わせねっと」などの自分達主体の取り組みを開始した。また、この時期にサークルの規約が制定され、サークルの活動目的が明文化されるが、これは活動内容を細かく規定するようなものではなかった。

その後、まっちワークが主体となって企画・運営する取り組みの中から、毎年4回発行の「わせねっと」と、毎年1回実施の「防災キャンプ」が恒例の取り組みとなる。これ以降、この2つの企画と商店会等が主催するイベントの手伝いを行うというのがまっちワークの毎年の活動となっていく。

2009年になると、実働メンバーが2名まで減少し(その後5名まで回復)、サークル存続の危機を迎える。この際、「街の手伝いを中心に活動するのではなく、自分たちのやってみたいことを中心に活動するサークルに変わっていかなければ新しいメンバーが入ってこないのではないか」という結論に達し、まっちワーク主体のイベントを次々に行うようになった。

防災キャンプや「わせねっと」が終了した要因として一番直接的ものは、サークルのメンバーが減少したことによる人手不足だろう。しかし、これらの一度途切れた取り組みが、人手が十分に増えた後でも復活しなかったのは、残ったメンバーが「防災教育」や「タウン誌の発行」というテーマに対して、そこまで強い興味を持っていなかったからであった。

「自分たちが地域の中でやってみたいことをどんどんやっていく」ために独立したサークルが代替わりを何度も重ねた結果、かつてサークルの自主的な取り組みとして熱心に行われてきた取り組みであっても、現在のメンバーの「やってみたいこと」と必ずしも一致しないという状況になっていたからだといえる。

<活動終了の影響の大きさ>

まっちワークが主体的に行ってきた防災キャンプや「わせねっと」が途絶えた一方で、まっちワークによる商店街主催イベント運営の手伝いは、年度によってイベントへの貢献度に波があるとはいえ、途絶えることなく継続的に行われていた。これは、自分達のサークルが自主的に行ってきた取り組みと違って、イベントへの手伝い・参加をやめてしまったら他の誰かにしわ寄せがいつてしまうということが目に見えて分かるというの大きいのではないかと。

4-2-4 地域との関係の変遷 (2009年~2013年)

2009年5月の時点でまっちワークは、実働メンバー2名となった。その後メンバーが増えたが、2009年度終わりの時点でも実働メンバー5人であった。5人で話し合い、商店会の手伝いをするだけではなく、自分達のやってみたいことをやっていくサークルにしないと、このまま新メンバーが入らず潰れてしまうのではないかと考えた。この方針に決めたことで、商店会からの頼み事を小さなことまで全て引き受けるのではなく、内容によって

は断ることもできた。

2011年夏にサークルが代替わりをしてからは、地球感謝祭運営におけるまっちワークの貢献度もいままでよりもやや小さくなった。これは、メンバーがまだ多くない中、まっちワーク主催の取り組みに労力を割くために、意図的に関与を減らそうとしたものであった。しかし、こうした意図を十分に伝達できていなかったために、創設以来深い関係を築いてきた商店会との関係が希薄になってしまうこととなった。

そこで、2012年秋の代替わり後にサークル内部で話し合い、商店会からの信用を回復することを目標の一つとする。2012年10月以降、毎月W商連の会合にメンバー数名が参加し、サークルの方針や活動報告を行うようになる。これにより、「まっちワークが今どういう方針で動いているか」を商店会のリーダー達に広く知ってもらうことができ、活動への理解が得られ、商店会からの信頼回復に繋がった。また、会合に参加することにより、商店会の考えていることや今後の予定を早めに知ることができるようになったため、商店会主催のイベントに対しても提案を行ったり、自分達のやりたい取り組みを付け加えたりすることがしやすくなった。結果的に商店会からの連絡を待って「受け身で手伝いをする関係」から、「手伝いをしつつも、自分達のやりたいこともやらせてもらう」関係を築くことができたといえる。このことから言えるのは、地域への活動報告や地域との情報交換を定期的に行えるような場に加わる、あるいは自分達でそうした制度を整えることの有効性である。

また、地域から見て「何をやっているのかよく分からない」と思われるようになったのは、かつて発行していた「わせねっと」がなくなった影響も大きかったのではないかと。年4回の「わせねっと」の配布は、読者の早稲田の街への関心を高めるという本来の目的に加えて、地域の商店や学校などを定期的に訪れて自分達の活動を報告する丁度よいきっかけとなっていた面もあったと考えられるからである。

4-3 アトム通貨実行委員会 早稲田・高田馬場支部事務局

4-3-1 アトム通貨学生事務局の成り立ち

アトム通貨実行委員会早稲田・高田馬場支部事務局は、全国に支部を持つ地域通貨「アトム通貨」の早稲田・高田馬場地域における流通を支える、大学生によって構成される組織である。学生でなければ事務局に参加できないという決まりはないが、早稲田・高田馬場支部の事務局は10年弱にわたって大学生によって主体的に運営されており、学生団体としての性質を持っている。アトム通貨実行委員会早稲田・高田馬場支部事務局の活動を見ていく前にまず、アトム通貨が誕生して学生による事務局運営が行われるようになった経

緯を説明する。

<アトム通貨の誕生>

アトム通貨の誕生は、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（以降、略称のWAVOCを用いる）で当時契約職員として働いていた松田卓也氏が、「世の中をよくするため、街の人のつながりを使って何かしよう。そのツール（道具）に」（毎日新聞, 2005, p.22）と考え、早稲田・高田馬場地域で地域通貨を流通させることを発案したことがきっかけであった。松田氏が企画書を持って早稲田・高田馬場地域の各組織に参加を呼びかけた結果、5つの組織によってアトム通貨実行委員会が結成された。アトム通貨の開始にあたっては、「いのちのまちづくり」の動きを牽引してきた安井氏等の商店街リーダー達の協力もあった（長野基, 2012, p.93）。

<学生による事務局引き継ぎ>

アトム通貨の流通初年度である2004年度と、2005年度（第2期）の間は、発案者の松田氏がアトム通貨実行委員会の事務局長を務め、社会人のボランティアが中心となって事務局を運営していた。この時はまだ、早稲田大学の学生は運営の手伝いをするという形での参加であった。2005年度の活動をもって、今まで事務局運営の中心であった社会人のボランティアメンバーが引退した。これに伴いアトム通貨を廃止することも検討されたが、今まで手伝ってきた学生達が事務局運営を引き継ぐことによって、アトム通貨を継続させることができた（毎日新聞, 2006, p. 27）。

2009年度には、川口支部（埼玉県）、札幌支部（北海道）、徳島支部（徳島県）という3つの支部ができ、今まで早稲田・高田馬場地域のみでの流通であったアトム通貨が他地域にも広がった。これに伴い、アトム通貨実行委員会本部がそれぞれの支部を統括するという運営体制となり、早稲田・高田馬場地域での運営も「早稲田・高田馬場支部」として行われるようになった。実際の運営を担当する「早稲田・高田馬場支部事務局」は、引き続き早稲田大学の学生が中心となって運営している。

4-3-2 アトム通貨学生事務局の現在の活動

ここからは、アトム通貨実行委員会早稲田・高田馬場支部事務局のメンバーへのヒアリングを元に現在の活動内容について記述する。

<アトム通貨学生事務局の運営体制>

ここからは、アトム通貨実行委員会 早稲田・高田馬場支部事務局の現在の活動を見ていく。なお、これ以降、アトム通貨実行委員会早稲田・高田馬場支部事務局のことは「アトム通貨学生事務局」と呼ぶこととする。

アトム通貨学生事務局は、アトム通貨実行委員会早稲田・高田馬場支部の事務局としての面と、早稲田大学の WAVOC 内の 1 プロジェクトとしての面を持っている。アトム通貨の組織として、学生事務局がメンバーを学生だけに絞っている訳ではない。また、WAVOC の各プロジェクトのメンバーとなるための条件は、18 歳以上であることだけなので、大学生でなくても構わないし、他大学の学生でも参加できる。しかし現状として、早稲田・高田馬場支部の事務局は、2006 年度以降学生による運営が続いている。

アトム通貨学生事務局の学生たちは、アトム通貨実行委員会のメンバーと常に相談をしながら活動している。ただし、実行委員会がアトム通貨学生事務局に指示出しをして動かしているというわけではなく、基本的に学生事務局の側から自分達のやりたい企画を提案し、それに対して許可やアドバイスをもらうという形である。学生事務局と実行委員会の間のやりとりは、毎月の定例会の場で行われ、そこで相談や報告をする。定例会の他にも、必要があれば連絡を取り合う。

例えば、学生事務局がパンフレット等の広報物を作成するにあたってアトムの絵を使いたい場合は、実行委員会メンバーの手塚プロダクションに必ず相談をする。著作権が関わってくるため、許可をもらう必要があるからである。その場で、パンフレットに関するアドバイスももらうこともできる。また、手塚プロダクションはイベント開催のノウハウを蓄積しているため、学生事務局が新しいイベントを実施したい時には、有用なアドバイスをもらうことができるという。このように、アトム通貨学生事務局は、基本的には自分達の意味でやりたいことを企画し、実行委員会の面々のサポートを受けながら実行していく組織である。

アトム通貨学生事務局と WAVOC との関係も、アトム通貨早稲田・高田馬場支部実行委員会との関係に似た関係である。WAVOC の各プロジェクトには、担当職員がつくことになっており、アトム通貨プロジェクトにも担当職員が 1 名ついている。担当職員に対して、学生から活動報告を行ったり構想中の企画について相談をしたりし、職員からアドバイスをもらっている。

加えて、月に一度財務ミーティングが開かれる。財務ミーティングでは、WAVOC 職員がアトム通貨プロジェクトの毎月のお金の動きを一つ一つ見て、通帳と照らしあわせて問題がないかどうかを確認している。アトム通貨プロジェクトでは、地域通貨を扱うという性質上、学生が多額のお金の流れを管理している。学生のお金の管理に問題があると、地域の加盟店や実行委員会など多方面に迷惑をかけてしまう。そのため、財務面で社会人からのチェックを受けることで、間違いが起らないようにしている。

学生事務局は現在、WAVOC 以外の大学職員・教員との強い繋がりは持っていない。ただし、毎年恒例の大学構内での打ち水イベントを実施するにあたっては、WAVOC 経由で早稲田大学総務部環境安全管理課の職員から許可をもらっている。

<アトム通貨学生事務局の活動目標>

「アトム通貨実行委員会規約」によると、アトム通貨実行委員会は下のような目的で活動している。

本会は「未来の子どもたちのために」をテーマに「地球環境にやさしい社会」「地域コミュニティが活発な社会」「国際協力に積極的な社会」「教育に真摯に向き合う社会」の4つの理念を柱とし、さまざまな社会貢献活動の支援を目的とする。

(アトム通貨実行委員会「アトム通貨実行委員会規約 2010年度改訂版」, 2014年1月5日閲覧)

アトム通貨学生事務局もアトム通貨の組織であるため、上記の4つの理念に沿って、アトム通貨をツールとして地域を盛り上げることを目標にするという点に関しては、一貫している。ただし、アトム通貨学生事務局という学生団体としての特定の活動目標は設定しておらず、学生の代替わりによって毎年メンバーが入れ替わるため、年度ごとにどのようなことに力を入れて活動するかが変わってくる。そのため、アトム通貨学生事務局は、代替わりによる方針転換が極端なものにならないように気をつけているという。例えば、ある年度では商店街と一緒に積極的に関画を実施する方針であったのに、次の年度になって急に商店街から離れてしまったりすると、信頼関係が崩れてしまう。こういくことが起こらないように、バランスに気をつけながら毎年度の活動の方向性を決めるようにしている。

<地域との関係構築>

アトム通貨学生事務局の地域との交流の基本は、アトム通貨加盟店への店回りである。学生事務局のメンバーそれぞれにエリアが割り振られており、一人当たり約20店舗を担当して、店回りを行っている。長期休みの前後の時期に全加盟店を回るほか、アトム通貨を配布してくれている店舗には、最低でも月に一度は顔を見せるようにしている。このように、一人一人のメンバーが決められた店舗の店主と継続的に顔を合わせるため、店主と学生が親密な関係になることもあって、店回りは地域の加盟店と学生事務局との関係を築く上で重要な役割を果たしている。

アトム通貨学生事務局は、地域との関係を引き継げるように意識的に力を入れている。業務と違って、地域のアトム通貨加盟店と築いた関係は後輩にそのまま引き継げる訳ではない。そこで、学生事務局では、引き継ぎ期間をしっかりと設けることで、繋がりを継続していけるよう努力している。エリアを担当していたメンバーがサークルを卒業する際には、事前に次の担当者を連れてエリア内の店を回り、後輩を紹介するようにしている。人と人との相性という要素があるため、商店と学生との関係を後輩に完全に引き継ぐというこ

とはできないが、それでも引き継ぎ時に前の担当者が次の担当者を十分に店に紹介することで、店との関係が途切れてしまうことは避けられる。

また、こうした日頃からの加盟店回りの他にも、商店会主催のイベントの手伝いを行ったり、アトム通貨のブースを出したり、アトム通貨の配布を商店会主催イベントで行ってもらったりしている。

<他の学生団体との関係>

WAVOC の他のプロジェクトと学生事務局の間には、現状ほとんど繋がりが無い。過去にいくつかのプロジェクトと一緒に単発企画を実施したことはあるが、WAVOC プロジェクト同士で定期的に情報交換をするような関係にある訳ではなく、学生事務局で何か企画を実施する際に声をかけてみる程度という程度である。

WAVOC プロジェクト以外の学生団体との関係は、地球感謝祭等の商店会主催イベントでの繋がりを基盤にしている。こうした地域イベントで知り合った団体に対しても、学生事務局から声をかけて一緒に企画を実施することがあった。

<2013 年度の活動>

アトム通貨学生事務局は、アトム通貨加盟店への連絡や流通期間終了後の決算などの事務的な仕事に加えて、地域での自分達主催のイベントの企画・運営等も行っている。以下に、2013 年度の主な活動を挙げる。これを見ると、アトム通貨学生事務局は早稲田・高田馬場地域のイベントにとっても積極的に参加していることが分かる。地球感謝祭をはじめとした商店会主催のイベントだけではなく、公的機関が主催する取り組みにも複数参加している。

○商店会主催のもの

- ・高田馬場駅付近の清掃イベントにブースを出展
- ・「早稲田地球感謝祭 2013」への協力
- ・「ファミリービンゴ大会」への協力
- ・「鶴巻町フェスティバル」に環境かるたのブースを出展
- ・「西早稲田子供天国」への協力

○公的機関主催のもの

- ・都立新宿山吹高校のワークショップで、高校生にアトム通貨の活動を紹介
- ・新宿区西早稲田リサイクル活動センター主催の「夏休み学習塾」にスタッフとして協力
- ・新宿リサイクルセンター主催のこどもまつりへのブース出展

○WAVOC 主催のもの

・早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC) 主催のプレゼンコンテストへの参加

○その他団体主催のもの

・「第 11 回全国大学生環境活動コンテスト」への参加 (5 回目の参加)

○アトム通貨早稲田・高田馬場支部主催のもの

- ・「ヒトマチプロジェクト」の企画・運営
- ・戸山公園での草むしり企画を企画・運営
- ・「早稲田打ち水大作戦 2013」の企画・運営
- ・「辛メンフェア」の企画・運営
- ・アトム通貨の他地域の支部を訪問 (合宿として)

4-4 学生環境 NPO 環境ロドリゲス

4-4-1 環境ロドリゲスの成り立ち

「学生環境 NPO 環境ロドリゲス (以下、環境ロドリゲスと呼ぶ)」は、環境に関心を持つ学生で構成される学生団体である。1997 年に発足した団体であり、団体全体としての活動理念は「学生が主体となって、多様なアプローチから環境問題の解決に貢献する」(環境ロドリゲス公式 HP「早稲田大学学生環境 NPO 環境ロドリゲスとは?」, 2014 年 1 月 5 日閲覧) ことである。団体名に「NPO」がついているのは NPO 法人であるからではなく、社会貢献を第一目的として活動しようという意識からつけられたものである。したがって、分類としては早稲田大学公認サークルに含まれる。メンバーは 1 年生から 3 年生までで構成され、2014 年 5 月時点のメンバー総数は約 80 名となっている。

活動理念を見れば分かる通り、環境ロドリゲスは環境問題に関連する様々な取り組みを行ってきており、活動フィールドは早稲田大学周辺地域に限定されているわけではない。しかし、主要な取り組みの一つとして、設立初期から早稲田大学周辺地域での取り組みも行ってきた。環境ロドリゲスの初代代表は 98 年から早稲田のまちづくりの動きに参加していた学生であったため、環境ロドリゲスは早い段階で早稲田大学周辺の商店街を中心とした取り組みに参加するようになった。エコ・サマーフェスティバルには、1998 年の第 3 回エコ・サマーフェスティバルからブース出展という形で参加しており、翌 1999 年からはエコ・サマーフェスティバルの運営における環境面での取り組みにも関わるようになった(ま

っちワークグループ早稲田'99-2000「20世紀末版 早稲田まちづくりレポート 第2部」, 2014年1月5日閲覧)。

エコ・サマーフェスティバルが「地球感謝祭」に名称を変えて以降も、環境ロドリゲスはイベント運営の環境対策面にに関わり続けている。例えば2002年の地球感謝祭では、イベントで使う容器を洗って再利用できるものにすることを提案し、イベントで出されるゴミの減量に貢献した。現在の地球感謝祭では、「エコ容器」と呼ばれる環境に配慮した容器が使用されているが、これを導入したのも環境ロドリゲスであった。

4-4-2 環境ロドリゲスの現在の活動

現在の環境ロドリゲスは、メンバー全員が一つの取り組みを一緒に行う団体ではなく、基本的に「企画」ごとに分かれて活動している。6つある企画の内、環境ロドリゲス設立初期からの早稲田大学周辺地域との繋がりを継続させてきたのは、「えこのわぐま」という企画である。えこのわぐまは、大学周辺地域においてゴミ問題改善に取り組む企画であり、主な活動として早稲田大学とその周辺地域で開催されるイベント（早稲田祭、稲門祭、地球感謝祭など）における環境対策を担っている。現在、地球感謝祭の運営において環境面での取り組みで貢献しているのはこの「えこのわぐま」であり、イベント当日に出るゴミの分別に加え、模擬店で使われるエコ容器に関する事務なども行っている。メンバーは地球感謝祭準備期間中に商店街で開かれる運営会議にも出席し、商店主達と連絡を取り合いながら地球感謝祭に向けた準備を行う。「えこのわぐま」は、イベントでの環境対策のほかに、学生サークルが新入生勧誘のために配布するビラを回収する取り組み「新歓レレレ隊」も行っている。

また、最近になって早稲田大学周辺地域での取り組みを開始した企画もある。子供たちへの環境教育活動を行うことを目的とした「ecoSMILE」という企画である。ecoSMILEが一番力を入れてきた活動は、年に一度福井県鯖江市を訪れて子供達への環境教育を行うことである。以前は早稲田地域との繋がりが弱く、早稲田で子供達への環境教育の取り組みを行ってみたいくてもなかなかきっかけが見つからなかった。そうした時に、アトム通貨学生事務局が2013年度に開始した、学生と地域の継続的な繋がりをつくる取り組み「ヒトマチプロジェクト」に誘われた。ここでの繋がりを機に、2013年から商店会主催のイベント「西早稲田子供天国」で、地元の子供たちに向けた環境教育ブースを出展するようになった。

4-5 早稲田祭運営スタッフ

4-5-1 早稲田祭運営スタッフの現在の活動

早稲田祭運営スタッフとは、2002年に再開した早稲田祭の運営を担う大規模な学生団体（総メンバー数600名ほど）である。1997年に早稲田祭が中止となった理由は、当時運営していた早稲田祭実行委員会の資金に問題があったからであった。このような経緯から、早稲田祭運営スタッフは大学からの資金提供を一切受けないこととなっている。したがっていわゆる大学公認サークルとは違う形態の学生団体である。早稲田祭運営スタッフは8つの局に分かれており、その中の一つ渉外局に、「地域チーム」が置かれている。渉外局地域チームの役割について早稲田祭2013の運営スタッフ代表のインタビューへの回答を引用する。

特徴的なのは、地域チームがあることです。早稲田祭は地域から苦情が出たら中止となるので、普段から地域との関係を構築するために、地域イベントのお手伝いなどをして関係を構築することで、その開催を維持できているという現状があります。毎月、商店会の会合に運営スタッフが出席して活動内容を報告し、大学外部と連携する取り組みを行う際などは、必ず事前に商店会に話を通します。

（Business Journal「一大ビジネス？早稲田祭運営の舞台裏～16万人集客、多額予算、企業並み学生スタッフ組織」, 2014年1月5日閲覧）

このように、毎年早稲田祭を円滑に開催するために、大学周辺地域との関係構築は欠かせないものとなっている。地域チームが中心となっていく、地域との良好な関係構築のための活動としては、まず「名物祭」がある。これは2005年に始まり現在まで続く取り組みで、早稲田大学周辺の飲食店から料理を提供してもらい、それを囲んで地域住民と学生が交流を深める会である。2008年には「地域おそうじ」が始まる。地域の子供たちと一緒に月に一度ゴミ拾いを行って地域を綺麗にする取り組みであり、これも現在まで続いている。さらに、大学周辺の商店・町会・寺社への挨拶回りや、上記記事にも書かれているW商連会合での活動報告、早稲田祭当日に迷惑をかけてしまう近隣の住宅への資料投函等も行っている。

地域主催イベントの運営の手伝いという面では、ファミリービンゴ大会、西早稲田子供天国等複数のイベントに参加しているが、なかでも貢献度が高いのは早稲田地球感謝祭の手伝いである。早稲田祭運営スタッフは地球感謝祭において、ステージの運営や会場設営などを

担当しており、地球感謝祭を運営する上で欠かすことのできない存在となっている。

こうした継続的に行っている地域での取り組みに加えて、早稲田祭ホームページでの商店主へのインタビュー企画、大隈通り商店街と早大西門通り商店街を舞台にした複数イベントの実施、商店主と学生のトーク企画といった、その年ごとの取り組みもある。

このように、早稲田祭運営スタッフは、地域チームを中心として様々な形で早稲田大学周辺地域との接点を持ち、地域との良好な関係を構築することに努めてきた。こうした努力もあってか、大学周辺地域の側でも早稲田祭の運営を大いにサポートしている。例えば、2011年に震災の影響で大隈講堂前ステージでのイベントが開催不可となった際には、翌2012年にステージイベントを復活させるために、商店街に署名をしてもらったり、大隈通り商店会の会長に同行してもらって警察署を訪ねたりしている。こうした商店街のサポートもあって、道路の車両通行規制を行うことができ、ステージでのイベントを復活させることができた（早稲田ウィークリー学園祭特別号『早稲田祭 2012』心に夢を、明日に彩りを」、2014年1月5日閲覧）。

4-6 4章のまとめ

4-6-1 地域での取り組みを継続させるために

<メンバーの興味の変化への対応>

まっちワークの事例では、代替わりによるメンバーの興味の変化が、長年継続してきた取り組みが途切れることに繋がっていた。また、活動が固定的になっていた時期があったが、メンバーが2人まで減った際に、「メンバーのやってみたいことをやっていく」団体として再スタートしたところ、それから5年でメンバーが50名近くまで増えている。このことから学生団体自体の存続という視点からも、学生の興味をある程度反映する余地があった方がよいと考えられる。

アトム通貨学生事務局が主体となって実施する毎年恒例のイベントとしては、2005年から現在まで続く「打ち水大作戦」などがある。こうした毎年継続して実施している活動に加えて、アトム通貨学生事務局は年度ごとに活動方針を決め、自分たちが主体となって行う取り組みを実施してきた。例えば、2012年度には「キャンドル yell」を実施し、2013年度には「ヒトマチプロジェクト」を開始した。これは、代替わりごとにその代のメンバーの興味を反映した活動を行えるということであり、メンバーの活動モチベーションの上昇に繋がっているのではないか。アトム通貨学生事務局メンバーへのヒアリングでも、「自分達の始めた活動を継続してもらいたいと思うが、後輩の活動を縛って強制することはできない」という旨の発言があった。

<活動終了の影響の大きさ>

アトム通貨学生事務局にとって一番重要な活動は、アトム通貨の換金などのアトム通貨の流通・管理に関する活動であるといえる。もし、アトム通貨学生事務局がこうした活動をやめてしまうと、早稲田・高田馬場地域のアトム通貨の流通が滞ってしまう。そうなれば、多数の関連団体に迷惑がかかってしまう。アトム通貨学生事務局のメンバーにヒアリングをした際にも、「関わる方が多いので責任が伴う。簡単にやめることは絶対にできない」という発言があったが、この責任の大きさも、活動継続の要因の一つであると考えられる。

早稲田祭運営スタッフ渉外局地域チームの地域での活動は、挨拶回りや毎月のゴミ拾いなど地道な活動も多いが、それでも長期間継続できている。こうした取り組みは、取り組みそのものが目的というよりは、地域との間に良好な関係を構築することで早稲田祭を存続させていくことが目的であると考えられる。早稲田祭はとても規模が大きく、多くの人に関わるイベントであり、自分達の活動がその早稲田祭の存続に不可欠であるということは、地域での地道な活動を継続する上で大きなモチベーションになっているのではないかと。

環境ロドリゲスの活動理念は、前述のように「学生が主体となって、多様なアプローチから環境問題の解決に貢献する」ことである。したがって、具体的にどのような取り組みを行うかどうかは定められておらず、長年継続している企画もあれば、新規に立ち上げた企画が短い期間で消えてしまうこともあるようだ。

環境ロドリゲスのその中で「えこのわぐま」の地球感謝祭等のイベントでの環境対策面の取り組みが続いているのは、「地域で継続的に実施されているイベントでの活動」という形態自体が、継続しやすい活動形態であるということが大きいのではないかと。自分達主体の取り組みである防災キャンプと「わせねっと」が途絶えて、メンバーが少なくなっていた時期のまっちワークも、商店会が主催する地球感謝祭等のイベント運営への協力は続けていた。これは、毎年手伝っていたイベントを急に手伝わなくなることで運営に支障を出すことは避けたいという気持ちがあったからだと考えられる。地球感謝祭を運営する上で、環境ロドリゲスの毎年の活動は欠かせないものとなっており、そのことが活動の継続につながっているのではないかと。

4-6-2 地域との良好な関係を構築するために

<地域との関係構築の制度化>

まっちワークは、W商連からの信頼の回復を目指して毎月の会合に参加するようになり、その結果良好な関係を構築することができた。他団体の活動を見ても、地域との定期的な接点を持つことは重要だと考えられる。

アトム通貨学生事務局は、アトム通貨の加盟店回りを定期的に行っている。また、担当の学生が卒業する際には次の担当者への引き継ぎをしっかりと行い、関係を途切れさせ

ないように心がけている。さらに、まっちワークが参加するよりも前から、W 商連会合に毎月参加し、活動報告を行ってきた。

早稲田祭運営スタッフも、W 商連の会合に毎月参加しており、活動報告を徹底している。また周辺地域への挨拶回りも行い、良好な関係性を維持してきた。

環境ロドリゲスの場合には、W 商連会合への参加のような地域との情報交換をを定期的に行おうという動きは見られなかった。環境ロドリゲスの場合は、あくまで「環境」がメインテーマであり、地域通貨を管理するアトム通貨、地域との良好な関係構築を目的とする早稲田祭運営スタッフ渉外局地域チーム、学生と地域の繋がりをテーマとするまっちワークなどに比べると、地域との関係構築にそこまで力を入れる必要はないとも言える。

この章の初めに述べたように、先行研究では、学生と地域の関係が「人付き合い」的關係から「組織対組織」の關係になったことで、継続性に支障がでてきたという分析が行われていた。しかし、大学生は 4 年で卒業し、大学卒業後も地域での活動続ける人はごく少数である以上、長いスパンで考えれば「組織対組織」の良好な関係を構築しておくべきだと考える。そのためには、学生団体の側で地域に定期的に顔を見せるための仕組みを整えたり、地域の定期的な話し合いの場に顔を出したりすることが有効なのではないか。もちろん、「人付き合い」的關係を否定しているわけではないが、「人付き合い」的關係は、組織対組織の関係を構築することによって実現できなくなるものではなく、十分両立させることができるものであると考える。

5章 地域と学生の新たな繋がりを生む動き

5-1 取り組みが生まれた背景

<これまでの学生団体どうしの繋がり>

これまで、地球感謝祭の運営に継続的に関わってきた4団体の活動を見てきた。この他にも早稲田大学の周辺地域をフィールドの一部として活動する学生団体は存在しているが、こうした学生団体どうしの繋がりには、個々のイベントでの繋がりだけで終わってしまうことが多かった。

<周辺地域をフィールドにした活動を行ってみたいと考えている学生団体>

また、いままで見てきた学生団体は、早稲田大学周辺地域（アトム通貨学生事務局は高田馬場地域も含む）と関わり合いながら活動することを継続してきた団体であったが、こうした学生団体だけが大学周辺地域と関わってみたいと考えているわけではない。このような、いままで地域との深い関わりがなかった団体も視野に入れた取り組みが、次に紹介するアトム通貨学生事務局のヒトマチプロジェクトである。

5-2 アトム通貨学生事務局の「ヒトマチプロジェクト」

早稲田大学の学生団体と早稲田大学周辺地域（高田馬場地域も含む）で新たにネットワーク形成の動きが出てきている。2013年度からアトム通貨学生事務局が開始した「ヒトマチプロジェクト」という取り組みである。アトム通貨学生事務局の元代表であり、ヒトマチプロジェクトの発案者である学生へのヒアリングを元に、ヒトマチプロジェクトについての説明を行う。

5-2-1 ヒトマチプロジェクト開始のきっかけ

ヒトマチプロジェクトの構想を始めたきっかけは、2013年度にアトム通貨が10期目を迎えるにあたって、アトム通貨の10年の積み重ねを活かせるようなことがしたいと考えたことであった。アトム通貨学生事務局はそれまでの9年間を通して様々な団体と関わってきたが、それぞれの企画ごとの単発の関係で終わっている場合が多かったため、地域で活動する他の団体と長期的な関係を築けるような仕組みを作るのが良いのではないかと考えた。また、10年という節目の年に街に対して何か恩返しをしたいという思いもあり、地域の様々な団体が交流する機会を設けることで、地域に何か還元できるのではないかと考え

ていた。

また、当時のアトム通貨学生事務局の代表は、他の学生団体から「早稲田の街で何かやりたいがきっかけが見つからない」という話を何回か聞いたことがあったという。例えば、地球感謝祭等を通してアトム通貨学生事務局と関わりのあった環境ロドリゲスは、福井県鯖江市で毎年行っている子供たちへの環境教育の取り組みを早稲田でも行ってみたいと考えていた。このような話を聞いて、アトム通貨学生事務局が地域と学生との橋渡しをすることに意義があると考えた。

ヒトマチプロジェクトには、アトム通貨をもっと色々な団体に活用してもらえるようにしたいという狙いもあった。アトム通貨に対して、単にお金を負担しなくてはならないものだというイメージを持っている団体もあるが、アトム通貨を使うことで社会貢献になり、地域との繋がりを作ることにもできるという点をアピールし、ゆくゆくは自発的にアトム通貨を導入してもらえるようにしたいという考えがあった。

5-2-2 ヒトマチプロジェクトに参加した団体(2013年度)

ヒトマチプロジェクトを始めるにあたって、アトム通貨学生事務局は、今まで何らかの形で関わったことがある団体に声をかけた。こうした団体どうしに横のつながりを作ってもらえるところから始めようと考えたからである。以下、アトム通貨学生事務局の声かけにより、2013年度のヒトマチプロジェクトに参加した団体を記す。

◆学生団体

- ・アトム通貨実行委員会早稲田・高田馬場支部事務局
- ・学生 NPO 農楽塾（以下、農楽塾と呼ぶ）
- ・環境ロドリゲス「ecoSMILE」企画
- ・まっちワーク
- ・理工展連絡会
- ・早稲田防災教育支援会（以下、WASEND と呼ぶ）

◆早稲田・高田馬場地域に縁がある企業

- ・株式会社手塚プロダクション
- ・株式会社スポーツクリエイト 高田馬場シチズンプラザテニススクール
- ・株式会社マルコメ

◆その他の団体（NPO 法人など）

- ・社会福祉法人 新宿区社会福祉協議会

- ・ 特定非営利活動法人シャプラニール＝市民による海外協力の会
- ・ 海の照葉樹林とコミュニティづくり支援プログラム
- ・ 早稲田大学周辺商店連合会
- ・ 宝泉寺

プロジェクトに参加している学生団体に注目すると、農楽塾は早稲田大学敷地内（大隈庭園）で農作物を育てている団体、理工展連絡会は理工学部の学園祭「理工展」を運営する団体、WASENDはインドネシア及び日本各地での防災教育を行う団体である。4章で紹介した、商店街との関係が深い団体と合わせると下の図のようになる。

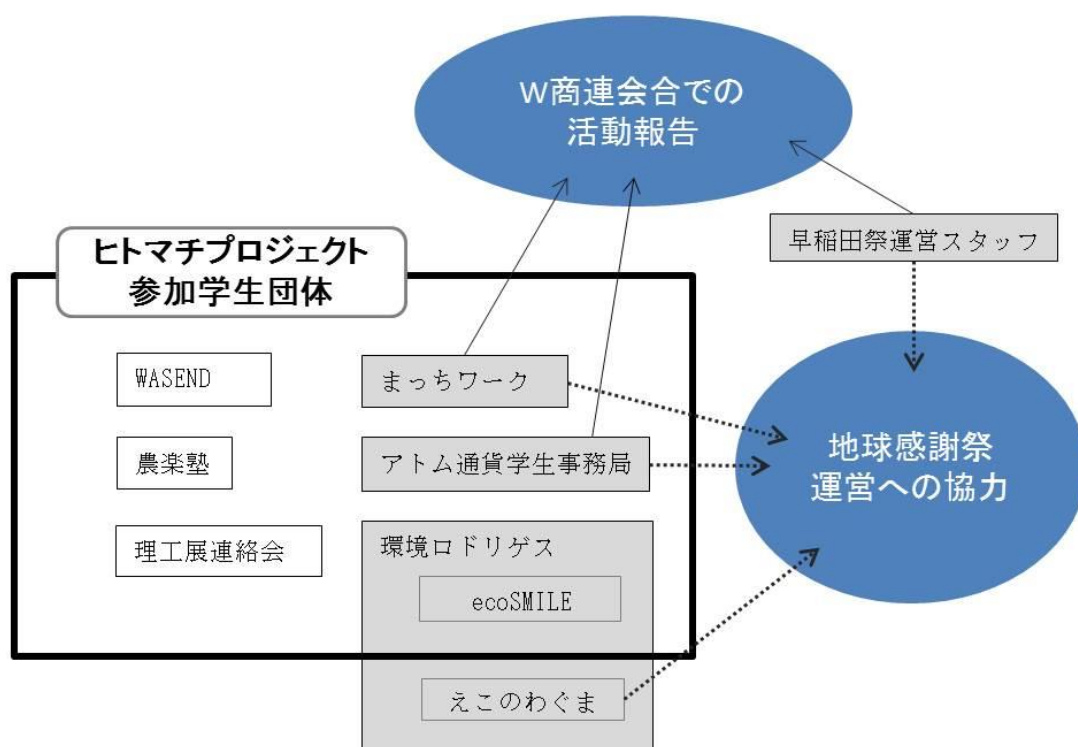


図 5-1 学生団体関連図

5-2-3 既存のネットワークとの関係

早稲田・高田馬場地域のネットワークとしては、地球感謝祭に関わる団体のネットワークなども元々存在している。こうした既存のネットワークとヒトマチプロジェクトには、重なっている部分もある。しかし、重なっている部分があるからといって競合関係になるというわけではなく、むしろ既存のネットワーク同士を繋げてさらに輪を広げていくことを狙っている。

5-2-4 2013年度に行われた取り組み

ヒトマチプロジェクトの主催者であるアトム通貨が、ヒトマチプロジェクトの名を冠して実施した取り組みの一つとしては、「てらこや in 宝泉寺」があった。早大南門通りにある宝泉寺において、地元の小学生を対象にして自由研究や宿題のサポートをするという企画である。子供達に教える内容は、例えば農楽塾であれば「農作業の工程について」のように、それぞれの団体の活動分野に即した内容であった。参加した団体は、以下の通りである。

◆学生

- ・アトム通貨学生事務局
- ・農楽塾
- ・WASEND
- ・まっちワーク
- ・環境ロドリゲス「ecoSMILE」

◆企業

- ・スポーツクリエイト

◆その他団体

- ・シャプラニール（認定NPO法人）

参加団体のうち、アトム通貨学生事務局とまっちワークは過去に宝泉寺を借りてイベントを実施したことがあったが、その他の団体にとっては地域との新たなネットワークを作る機会となった。特に、子供たちへの環境教育を行うことを目的とする環境ロドリゲス「ecoSMILE」にとっては、目的によく合致した企画であったといえる。また、シャプラニールが後に宝泉寺で行われた別のイベントにも参加するということがあったことから、イ

ベント一回きりの関係になることは今のところ避けられていると考えられる。

5-2-5 ヒトマチプロジェクトの成果

ヒトマチプロジェクトの取り組みの数値的な評価は難しいが、参加団体間の横の繋がりをつくるという部分では、成果が見られた。

学生団体と地域の新たな繋がりという点では、環境ロドリゲス内の企画「ecoSMILE」は今まで早稲田地域との繋がりや弱く、早稲田で子供達への環境教育の取り組みを行ってみたくてもなかなかきっかけが見つからなかった。ecoSMILE はヒトマチプロジェクトを期に、商店会主催の子供達がメインターゲットのイベントである西早稲田子供天国に参加することを決め、子供達への環境教育の企画を実施した。

また、早稲田地域での活動を行いたいと考えていた企業やNPOにもメリットがあったという。企業やNPOが地域に企画を持ち込むと、営業だと思われることや怪しいと警戒されてしまうこともあったが、ヒトマチプロジェクトを通すことで活動の場を地域に広げられたということがあった。NPO シャプラニールは、ヒトマチプロジェクトに参加したことで宝泉寺との繋がりができ、前述の宝泉寺での寺子屋企画に参加した。

また、「ヒトマチプロジェクト」から生まれた企画ではないが、まっちワークが2014年5月に、宝泉寺の境内を会場にしてフリーマーケットや学生団体のパフォーマンス等を行うイベントを運営した際には、ヒトマチプロジェクトで繋がりのできたシャプラニールに対してイベントへの参加を呼びかけ、シャプラニールはこれに参加している。

5-2-6 ヒトマチプロジェクトの今後

<プロジェクトの継続に関して>

ヒトマチプロジェクトには参加団体どうしの繋がりを継続的なものにしようという狙いがあるが、ヒトマチプロジェクトを動かしているのはアトム通貨学生事務局の学生達である。ヒトマチプロジェクトは2013年、2014年と続き、アトム通貨学生事務局は2015年度もヒトマチプロジェクトの運営を継続していく予定であるが、アトム通貨学生事務局のメンバーが何度も入れ替わった後にも当初の目的を見失わずに継続していくことができるかという点は課題となっている。

ただし、ヒトマチプロジェクト発案者のアトム通貨学生事務局の元代表は、ヒトマチプロジェクトは形を少しずつ変えながら長い期間継続していくのではないかと考えて持っている。ヒトマチプロジェクトは、地域の学生・商店会・企業・NPO等の繋がりを単発で終わらせず継続的なものにしようということが主な目的であり、その中でどのような企

画を実施するかは定められていないからである。

これは、4章で行った学生団体の取り組みの継続に関する分析とも一致しているように思われる。ヒトマチプロジェクトは、内容に厳しい制約があるわけではなく、代替わりを繰り返してもその時のメンバーの興味に応じて毎年度新しい要素を付け加えられる余地があるといえる。このことは、ヒトマチプロジェクトを継続することに対してプラスに働くのではないだろうか。

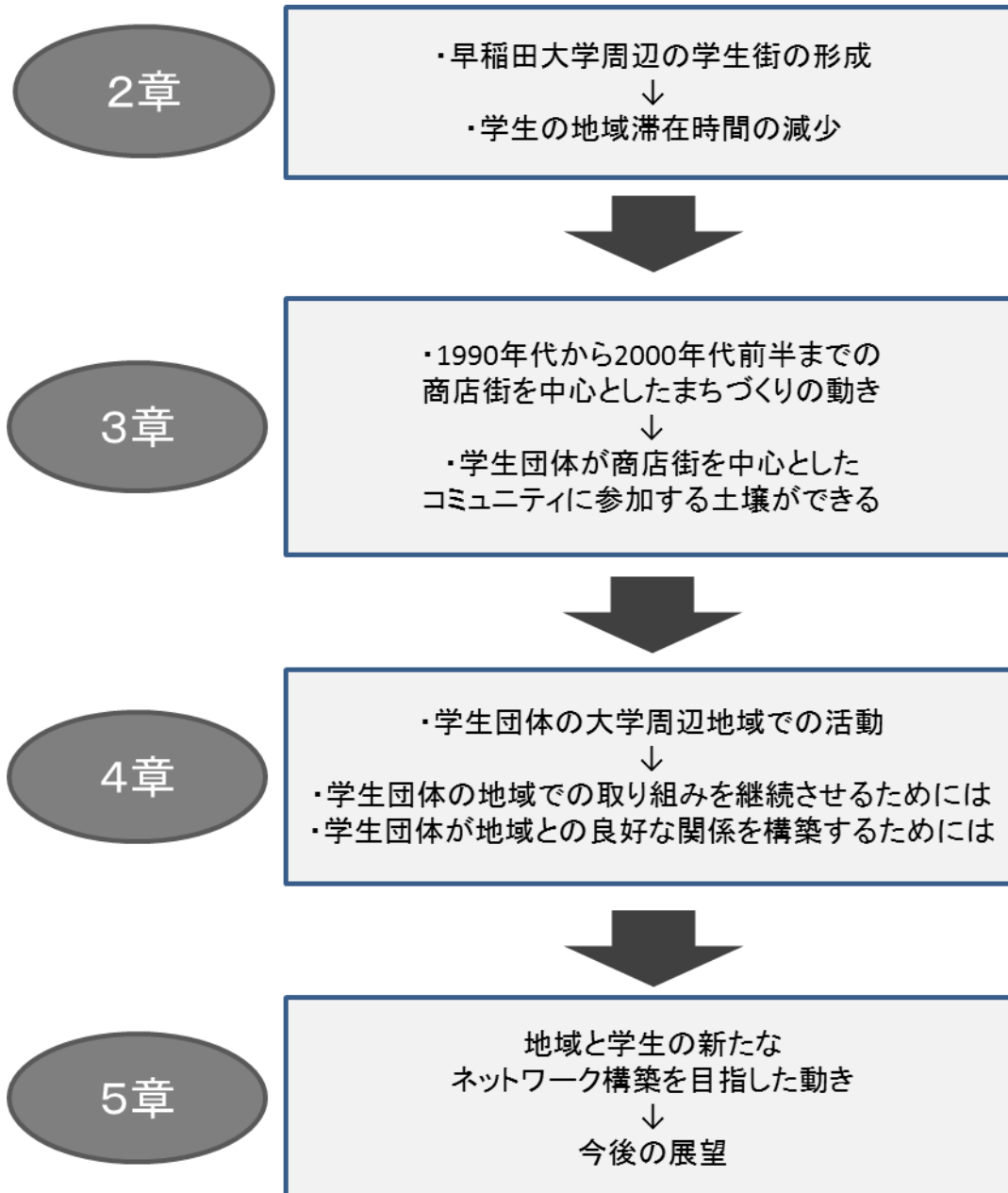
<今後期待できること>

ヒトマチプロジェクトに参加している団体は、いままでにアトム通貨と何らかの形で関わりがあった団体である。アトム通貨学生事務局が企画・運営している取り組みであり、まだ始まったばかりの取り組みであるためこれは当然のことだろう。ただし、今後このプロジェクトを通して、早稲田・高田馬場地域と早稲田大学の学生が関わり合う動きがより活性化するためには、少しずつ参加団体を増やしていけると良い。

学生団体に関しては、環境ロドリゲスの「ecoSMILE」企画の例のように、「早稲田大学周辺地域での活動を視野に入れているがきっかけが見つからない」という団体はまだ存在しているはずである。現在参加しているそれぞれの学生団体が知り合いの団体に声を掛けるだけでも、輪の広がりが期待できるのではないか。

内田らの研究では、大学が地域と学生団体のマッチングを行うことが提案されていたが、今のところ大学によってそのような取り組みが行われることはなかった。ヒトマチプロジェクトは、アトム通貨という学生団体自身がこの役割を果たしてしまおうという取り組みであり、これが継続できればとても意義のあることだと考えられる。

6章 論文のまとめ



1章で問題意識を述べ、2章で早稲田大学周辺地域と学生との関係の歴史について簡単に振り返った。

3章では、1990年代から2000年代前半にかけて行われた、早稲田大学周辺の商店街を中心としたまちづくりの動きをまとめ、早稲田大学周辺地域と継続的に関わりながら活動する学生団体が生まれた背景を確認した。

4章では、早稲田大学周辺地域での活動を継続的に行ってきた学生団体について、学生団体まっちワークの事例を中心に、学生団体の地域での取り組みの継続と、学生団体と地域との良好な関係の構築のために重要なことを考察した。

5章では、大学周辺地域と学生団体の新たなネットワーク構築の動きである「ヒトマチプロジェクト」を紹介するとともに、早稲田大学の学生と大学周辺地域とのこれからの関わり方についての展望を述べた。

<論文の意義>

本論文は、早稲田大学周辺地域で活動する学生団体という狭い対象について執筆した。そのため広がりほとんどないかもしれないが、一つの団体の設立から現在までを学生目線でまとめられたことには、意義があったのではないかと考える。地域と関わる活動をする学生にとって、少しでも参考になる部分があれば幸いである。

<謝辞>

本論文の執筆にあたり、見放さずに指導して頂いた浦野正樹教授に心より感謝いたします。また、ヒアリングに快く協力してくださったW商連会長並びにアトム通貨学生事務局の皆様、そしてまっちワークのメンバー及び先輩に感謝いたします。

○参考文献リスト

- 朝日新聞「早大環境サークルに特別賞（キャンパスあらかると） /東京」、2003.03.26、朝刊/東京、2 ページ
- アトム通貨実行委員会「アトム通貨実行委員会規約 2010年度改訂版」
(<http://atom-community.jp/about/clauses.html>)、2015年1月5日閲覧
- アトム通貨早稲田・高田馬場支部(<http://atom-community.jp/waseda-takadanobaba/>)、2015年1月5日閲覧
- 内田友紀、内田奈芳美、佐藤滋「大学周辺地域まちづくりにおけるまちづくり主体の関係性の変遷と実態に関する研究 ―新宿区西早稲田周辺地域を対象として―」、日本建築学会大会学術講演梗概集（中国）、2008年、pp. 237-240
- 環境ロドリゲス公式 HP(<http://www.rodorigues.com/>)、2015年1月5日閲覧
- 環境ロドリゲス公式 HP「早稲田大学学生環境 NPO 環境ロドリゲスとは？」
(<http://www.rodorigues.com/#!rodotoha/c1edy>)、2015年1月5日閲覧
- 佐藤能丸『近代日本と早稲田大学』、早稲田大学出版部、1991
- 佐藤能丸『大学文化史』、芙蓉書房出版、2003
- 島善高『早稲田大学小史 [第3版]』、早稲田大学出版部、2008
- JA 東京中央会「江戸・東京やさいマップ 早稲田ミョウガ」
(<http://www.tokyo-ja.or.jp/farming/tokyo04.html>)、2014年12月28日閲覧
- 早田宰、加藤基樹、沼田真一、阿部俊彦『ともに創る！まちの新しい未来 ―気仙沼復興塾の挑戦』、早稲田大学出版会、2013
- 特定非営利法人全国全国商店街まちづくり実行委員会「平成 21 年度エコポイント等 CO2 削減のための環境行動促進モデル事業報告書（アトム通貨エコ・アクション・ポイント事業）＜暫定版＞」、2010
- 長野基「地区まちづくりを支えるリーダーシップに関する都市レジーム論からの一考察 ―新宿区西早稲田地区を事例として―」首都大学東京都市環境科学研究科都市システム科学域『都市科学研究 第4号』、pp. 87-98、2012
- Business Journal「一大ビジネス？早稲田祭運営の舞台裏～16万人集客、多額予算、企業並み学生スタッフ組織」
(http://biz-journal.jp/2013/11/post_3238.html)、2015年1月5日閲覧
- 毎日新聞「アトム通貨：運営3年 社会人ボランティアから運営引き継ぎ、支える早大生 /東京」、2006.04.27、地方版/東京、27 ページ
- 毎日新聞「ここに注目：2年目迎えた『アトム通貨』 商品購買のきっかけに /東京」、2005.04.14、地方版/東京、22 ページ
- まっちワークグループ早稲田 Official Blog

(<http://blog.goo.ne.jp/match-work>)、2015年1月5日閲覧
まっちワークグループ早稲田'99-2000
(<http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Cafe/4196/index.html>)、2015年1月5日閲覧
まっちワークグループ早稲田'99-2000「20世紀末版 早稲田まちづくりレポート 第2部」
(<http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Cafe/4196/special/waseda-matirepo2.html>)、
2015年1月5日閲覧
まっちワークグループ早稲田'99-2000「防災キャンプ」
(<http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Cafe/4196/bousai.html>)、2015年1月5日閲覧
まっちワークグループ早稲田'99-2000「まっちワーク誕生物語」
(<http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Cafe/4196/syukai2.html>)、2015年1月5日
日閲覧
まっちワークグループ早稲田'99-2000「わせねっと」
(<http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Cafe/4196/wasenet1.html>)、2015年1月5日
日閲覧
まっちワークグループ早稲田「まっちワークグループ早稲田規約」、2001
水稲荷神社「神社のご案内」
(<http://mizuinari.net/guide.html>)、2014年12月28日閲覧
李彰浩、後藤春彦、三宅諭「大学周辺地域の衰退とまちづくり活動の展開 ～早稲田大学
『西早稲田キャンパス』と周辺地域を事例として～」、日本建築学会計画系論文集、第
542号、pp. 175-182、2001
早稲田いのちのまちづくり実行委員会『ゼロエミッションからのまちづくり 一早稲田商
店街のビッグバン・ドキュメント一』、日報、1998
早稲田ウィークリー学園祭特別号「『早稲田祭 2012』心に夢を、明日に彩りを」
(<http://www.wasedaweekly.jp/detail.php?item=502>)、2015年1月5日閲覧
早稲田かつお祭りホームページ
(<http://katsuomatsuri.com/index.html>)、2015年1月13日閲覧
早稲田祭 2005「地域特集」
(<http://www.wasedasai.net/2005/feature/region/>)、2015年1月5日閲覧
早稲田祭 2014「地域への取り組み」
(<http://www.wasedasai.net/2014/activity/region/>)、2015年1月5日閲覧
早稲田大学大学史編集所『早稲田大学百年史第4巻』、早稲田大学出版部、1992
早稲田地球感謝祭実行委員会、早稲田大学周辺商店7商店会「早稲田地球感謝祭 2014 企画
概要」、2014
早稲田の街・わせまちドットコム

(<http://www.wasemachi.com/>)、2014年1月5日閲覧
早稲田の街・わせまちドットコム「早稲田商店街の紹介」

(<http://www.wasemachi.com/syoutengai/index.html>)、2015年1月5日閲覧
早稲田の街・わせまちドットコム「早稲田のまちづくり・学生との連携」

(<http://www.wasemachi.com/machi/gakusei.html>)、2014年1月5日閲覧

○参考資料 1 商店街を中心に実施しているイベント

<早稲田かつお祭り>

近年新たに始まった取り組みとしては、東日本大震災を契機として 2012 年から始まった「早稲田かつお祭り」がある。イベントの実施企画(2013 年度は 9 月末からの 3 週間)、商店街のイベント参加店舗で「かつお」を中心とした東北地方産の食材を使った料理を提供したり、東北地方産の商品の販売を行ったりするという企画である。また、商店街の各店舗を利用した客には、「かつお刺身試食券」と「抽選補助券」が配られた。イベント開始日とイベント終了日にそれぞれかつおの試食会と抽選会が行われ、商店街の利用客が参加できるという仕組みである。

イベントを企画したのは、早稲田大学社会科学部の早田教授と商店会の櫻井氏であり、早稲田大学の JA 共済寄附講座「震災復興のまちづくり(副題:気仙沼復興塾)」を受講する学生たちがこのイベントの実施に大きく貢献している他、アトム通貨学生事務局やまちワークも手伝いをしている。

地球感謝祭やかつお祭りのような W 商連が主催するイベントの他にも、大学周辺地域の各商店会を中心として実施するイベントがあり、これらにも学生団体の参加が見られる。以下、簡単に紹介する。

<西早稲田子供天国>

主催:早稲田商店会 協力:大隈通り商店会

早稲田大学早稲田キャンパスから見て北東方向にある、仲通り・大隈通りで開かれるお祭りである。綿あめやスーパーボールなどの屋台や、各地の物産展に加えて、「移動動物園」と称してウサギやヒツジ等と触れ合えるコーナーも設けている。ブースの出展や路上でのパフォーマンス、運営面での協力等で複数の学生団体が毎年参加している。

<ファミリービンゴ大会>

主催:ワセダグラウンド商店会

水稲荷神社を借りて行われる、地域住民向けのビンゴ大会である。ビンゴ大会の会場には、屋台や子供達向けのゲームコーナーもあり、毎年複数の学生団体が運営を手伝っている。

<西門デーフェア>

主催:早大西門通り商店会

早稲田大学の西門付近にある商店街で、毎年 4 月頃に開催される。西門通り商店会で買い物をするともらえる券で、抽選会に参加できるというものである。まちワークの学生

が毎年抽選会を手伝っている。

<鶴巻町フェスティバル>

主催：鶴巻町フェスティバル実行委員会

早大通りを歩行者天国にして、フリーマーケット等を開催するイベントである。アトム通貨などがブースを出店している。

<南門ストリートフェスティバル>

主催：早大南門商店会

抽選会がメインのイベントだが、学生団体によるパフォーマンスも行われる。

○参考資料 2 早稲田大学周辺地域に関する論文の要旨まとめ

1. 李彰浩、後藤春彦、三宅諭「大学周辺地域の衰退とまちづくり活動の展開 ～早稲田大学「西早稲田キャンパス」と周辺地域を事例として～」、日本建築学会計画系論文集、第 542 号、pp. 175-182、2001 年

研究目的は、「都市に立地する大学と周辺地域で展開する市民参加に基づくまちづくり活動に着目し、周辺地域の衰退への対応策を導き出そうとする」ことである。

論文の構成としては、(1)まずは周辺地域が衰退している現状を明らかにし、(2)次に地域住民の大学との連携に対する意識を分析している。(3)それから 1999 年までの早稲田大学周辺地域におけるまちづくりの取り組みを紹介し、今後の課題を示している。

調査対象地域は、早稲田大学周辺商店連合会がすべて含まれる南北約 800m、東西約 1300m の地域と定義されている。

(1) 周辺地域の衰退

周辺地域の施設数に関しては、「余暇施設（スポーツ施設、雀荘など）」「宿泊施設（下宿、寮など）」「飲食施設（喫茶店、食堂など）」「学習支援施設（本屋、文房具屋など）」の 4 つに分類し、1998 年から 10 年ごとに 1968 年まで遡って調査している。全体の傾向としては 78 年をピークに減少しており、特に 88 年から 98 年にかけてマンションやオフィスビルなどに建て替えられたことで施設数が急激に減少していた。

また、学生生活に関する早稲田大学の統計資料の分析と、W 商連の店舗に対しての意識調査（全 486 店舗に調査票を発送し、回収総数 79 票）を実施し、二つの結果を合わせて、周辺地域における学生の滞在時間が減少しているのではないかと結論付けている。

(2) 地域住民の大学との連携に対する意識

(1) でも用いられた、W 商連に対するアンケート調査による分析である。以下、主なものを挙げる。

- ・大学から影響を受けていると感じている人が多い
- ・大学との交流の必要性を感じている人が多い
- ・大学のどのような施設が開放されているのか知らない人が多い

(3) 早稲田大学周辺地域におけるまちづくりの取り組みの紹介と今後の課題

99 年時点での取り組みが分野ごとに分けて紹介され、それぞれの分野における課題が挙げられているが、ここでは省略する。

当時の早稲田のまちづくり活動全体に関しては、「大学と地域住民の連携に基づいたまち

づくり活動の大多数が『集会・イベント』分野に集中しており、恒久的な効果が期待できる『教育・研究』『組織・施設』分野での積極的な取り組みが求められている」と指摘されている。

2. 長野基「地区まちづくりを支えるリーダーシップに関する都市レジーム論からの一考察 ―新宿区西早稲田地区を事例として―」、首都大学東京都市環境科学研究科都市システム科学域『都市科学研究 第4号』、p87-98、2012年

地区まちづくりにおけるリーダーシップの担い手とその機能について、「都市レジーム論」の視点から分析を行う論文である。「都市レジーム」とは、「政策目的によって動機付けられたセクターを越えた参加主体による一定の特徴的なアジェンダを持った比較的安定的でインフォーマルな協力関係」である。この論文では、都市レジーム論が早稲田地区に援用されており、商店街や町会、大学等の組織の中心メンバー達が、「比較的安定的でインフォーマルな協力関係」を形成しながらまちづくりを推進してきたことが描かれている。長野はこれをコミュニティレベルでのレジーム、「コミュニティ・レジーム」と呼んだ。

さらに、インフォーマルな関係であるため本来ならば不可視的なコミュニティ・レジームが、早稲田においては一定の可視性を持っていたと主張されている。これは、リーダー達の積極的なメディア利用によりコミュニティの外部に「誰がリーダーか」ということが伝わったからである。このことから、早稲田のまちづくり活動には、早稲田のまちをフィールドにやりたいことを実現しようとする「政策企業家」的な主体が参入しやすかったという特徴があったと分析されている。

こうして自己の政策目的を実現するために早稲田地区内外からやってきた「政策企業家」的主体の提案に対して、リーダーたちは「それは早稲田地域にも必要なことだろう」という承認や意味づけを与えていた。

また、早稲田地区のまちづくり活動におけるリーダーシップは、リーダーの人柄の魅力によって支えていたと同時に、リーダーによって設定された目標・アジェンダの「正当性」が参加者を引きつけたことが認められた。

さらに、リーダーたちは、自身の社会的立場を利用して、「政策企業家」的主体が政策目的を実現するために必要な資源の保有主体への橋渡しも行っていた。

また、リーダーたち自身が「政策企業家」的主体として活動することもあった。

「長期的にまちづくり活動が推進されてゆく上で避けることが出来ないリーダーシップの継承・交代については十分に検討できてはいない」ことを、筆者自身が課題の一つとして挙げている。理論部分に関しては2011年の文献からの引用もあるが、ヒアリング調査を交えた早稲田大学周辺地域の事例分析に関しては、2005年度までで終わっている。

3. 内田友紀、内田奈芳美、佐藤滋「大学周辺地域まちづくりにおけるまちづくり主体の関係性の変遷と実態に関する研究 ―新宿区西早稲田周辺地域を対象として―」、日本建築学会大会学術講演梗概集（中国）、2008年、pp. 237-240

この論文の目的は、「大学に属する学生団体、及び地域住民の2者に着目し、主体間の関係性の変遷と継続性、そして現在の活動実態から大学周辺地域の協働まちづくりの課題を明らかにすることで、地域まちづくりに貢献する学生団体の苗床としての大学の役割を提案すること」である。対象地域は、早稲田大学周辺商店連合会が存在する範囲としており、これは早稲田大学周辺地域を対象にする複数の論文に見られる範囲設定である。

論文では初めに、90年代から2007年までの早稲田のまちづくり活動における「主体間の関係性の変遷」を整理している。初期には、学生のまちづくり活動への参加は個人的なものであったのが、2000年頃にまちづくりに参加する学生が組織化していった。その後、学生の組織化がさらに進み、窓口が明確になった。そして、2007年時点での早稲田のまちづくり活動の特徴を「同時多発性」と表現している。地域と学生の繋がりが多発的な異なるネットワークをつくり始めており、この同時多発性によってイベントが多発している。同時多発性のもとで生じる課題については、個々のイベントのパワーダウンや単発化が進んだことが挙げられている。

また、「地域と学生との関係は当初の『人間付き合い』的な関係性から、『組織対組織の付き合い』へと変化し、イベント後には交流が途絶える事も多くなり、早稲田自体から離れる学生も生じてきている」としている。「継続性」に関しては、学生と地域の「関係性」に起因するものであると述べている。

次に、学生のまちづくり参加の継続性が学生と地域の関係性に起因するという前提のもと、学生団体と地域の関係性に関してヒアリング調査による分析が行われている。学生へのヒアリングは、(1)活動のフィールドとして地域に参加する学生団体、(2)まちづくりを目的として地域に参加する学生団体に対して行っており、「地域」の意見としては商店会の人物の意見が取り上げられている。具体的にどの学生団体、どの商店会所属の人物にヒアリングを行ったかは伏せられている。(1)タイプの学生団体に関しては1団体を取り上げ、2006年の「南門フェスティバル」実施前後の地域との関係性の変化について質問している。(2)タイプの学生団体に関しては、地球感謝祭に関わる3つの学生団体にヒアリングを行い、地球感謝祭前後の関係性の変化について質問している。ただし、匿名の3団体の学生の意見が混ざっているため、それぞれの団体の活動目標・組織形態等の差異は考慮されていない。

(1)、(2)の両タイプに共通する地域と学生の関係性構築の課題として、学生と地域が双方の活動特性の実態を把握できていないことが挙げられている。そしてこのことが学生の活動の継続性を阻む要因となっているとしている。

以上から、大学周辺の学生が関わるまちづくり活動における課題が「ミスマッチ」とい

う点にあるとまとめている。ミスマッチが特に生じていた点として、次の 3 点を挙げている。

- ・ 学生と地域の活動での責任の所在や意思決定のミスマッチ
- ・ 学生と地域組織のお互いの立場や関係性に対する認識不足
- ・ 活動に対する温度差

最後に、地域と学生のミスマッチを解消するための方策として大学の主体的な参加を訴え、地域—学生間の責任の所在や意思決定に関する議論に対して受け皿を提供すること、地域と学生の組織マッチングを担うことが提案されている。なお、このような動きは 2014 年現在見られない。

○参考資料3 早稲田のまちづくりを取り上げた記事

「街づくりスクラム、まず今月下旬に米国視察——早大と周辺5商店街。」

(『日本経済新聞』 1989年8月3日 地方経済面 東京15ページ)

早稲田大学と周辺商店会がアメリカの大学とその周辺地域の視察を共同で行うことが記事になっている。西早稲田地区の再開発や大学の施設建て替えを控えた早稲田大学が、商店会に視察への参加を呼びかけて実現した。

「早稲田の学生と共同で商店主がイベント開催、赤羽克達氏（人・話題）」

(『日経流通新聞』 1990年7月10日 17ページ)

大隈通り商店会が早大生と合同で「うずき祭」というイベントを実施したことが記事になっている。学生によるバンド演奏や商店街でのフリーマーケットが行われた。

「都の西北、工事中、早大周辺、再開発の波（消費者情報）」

(『日経流通新聞』 1992年4月7日 23ページ)

早稲田大学周辺地域でビルやワンルームマンションが増加し、街並みを変貌しているという内容の記事である。

「来たれ！団塊世代 変わるワセダの学生街 商店会が自主講座開始／東京」

(『読売新聞』 1992年12月12日 東京朝刊 都民 22ページ)

「ワセダ・カルチェラタン」という名の団塊の世代を対象にした自主講座に関する記事である。商店会の桜井一郎氏が呼びかけ、早稲田大学の教授を招いて「団塊世代の高齢化社会」について調査を行ったり、議論を深めたりしていくというものであった。

「“知縁社会”に参加しませんか ワセダ・カルチェラタンに9分科会誕生／東京」

(『読売新聞』 1995年1月24日 東京朝刊 都民2 29ページ)

1992年に始まった自主講座「ワセダ・カルチェラタン」の会員が80名ほどとなり、9つの分科会に分かれて月1度の活動を行っているということが書かれている。

「早大キャンパスでゴミゼロ実験 『エコ・サマー・フェスティバル』」

〔『朝日新聞』 1996年8月22日 朝刊 30ページ〕

第1回エコ・サマーフェスティバルで実施予定の取り組みの具体的内容について書かれている。

「教科書に再生紙を 東京・新宿など3区の商店街呼びかけ 文部大臣に使用要請へ」

〔『読売新聞』 1997年5月15日 東京朝刊 都民 34ページ〕

W商連を含む都内13の商店会が、教科書への再生紙使用の促進を文部大臣に要請する。

「ごみ減量からまちづくり 早稲田の商店街、大学、企業、行政 /東京」

〔『朝日新聞』 1997年8月18日 朝刊 東京〕

第2回エコ・サマーフェスティバルについての記事である。第2回はエコだけではなく、震災対策やバリアフリーにもテーマを広げたということが書かれている。

「どこへ逃げるの 早大と商店街、避難方法検討へ /東京」

〔『朝日新聞』 1997年09月02日 朝刊 東京 〕

早稲田大学と周辺商店街が震災時の対応についての話し合いを初めて行ったことが書かれている。

「[ひと・つどい] 桜井一郎さん おれたちの早稲田祭を 開かれた学生街目指す」

〔『読売新聞』 1998年6月30日 東京朝刊 人生A 33ページ〕

「ワセダ・カルチュラタン」などを企画してきた桜井一郎氏（当時W商連事務局長）が、どのような思いで早稲田での活動を行ってきたかということについて書かれている。

「障害あるけど気楽に生きる 早大生が『五体不満足』出版 心のバリアフリー目標」

〔『読売新聞』 1998年11月10日 大阪朝刊 生活A 25ページ〕

早稲田のまちづくり活動に参加していたメンバーの一人である乙武洋匡氏が、『五体不満足』を出版した。

「主役動き活気戻った（あふれる民力：1 21世紀私たちは第1部）」

〔『朝日新聞』 1999年1月1日 朝刊 1総 1ページ〕

早稲田商店会の安井氏が 1998 年の 1 年間で 51 件の講演をこなしたこと、乙武氏も 60 件もの講演をこなしたことが書かれている。

「東京・早稲田で全国商店街サミット 15 地域がエール交換」

（『読売新聞』 1999 年 06 月 29 日 東京朝刊 都民 30 ページ）

安井氏が会長を務める早稲田商店会の呼びかけで開催された「全国リサイクル商店街サミット」についての記事である。全国 15 の商店街と行政、環境機器メーカーなど約 100 人が参加し、エコ・ステーションの見学や情報交換を行った。商店街同士のネットワークを作り、今後も相互に情報を発信しあうことが決まった。

「安井潤一郎さん 修学旅行生を迎える早稲田の商店会長（ひと）」

（『朝日新聞』 1999 年 9 月 17 日 朝刊 3 総 3 ページ）

まちづくりの取り組みを機に、多くの修学旅行生が早稲田に来るようになったことが記事になっている。修学旅行生は大学のバリアフリー校舎やエコ・ステーションなどを見学する。

「ベストセラーこの 1 年 メガヒット出たが“冬”続く」

（『読売新聞』 1999 年 12 月 25 日 東京夕刊 夕書評 4 ページ）

1998 年 10 月に発売された『五体不満足』が 422 万部のベストセラーとなったことが伝えられている。

「再出発中高年、商店街に活力——早稲田、熟年の企業支援、新会社立ち上げ。」

（『日本経済新聞』 2000 年 2 月 13 日 朝刊 29 ページ）

まちづくり会社「ワセダウェーブ」の設立に関する記事である。中高年のベンチャービジネスを支援することを目的として、商店主ら 40 人が出資して立ち上げた。また、「ワセダ・カルチャータン」のメンバーが 2000 年時点で 200 名まで増えたことが書かれている。

「早稲田商店会エコステーション事業部長藤村洋一氏——客にも店にも利点（人・話題）」

（『日経流通新聞』 2000 年 4 月 25 日 19 ページ）

エコ・ステーションに設置される容器回収機の考案者、藤村洋一氏についての記事である。エコ・ステーションによる販売促進の仕組みが説明されている。

「商店街ネットワーク社長木下斉氏——商店街活性化に取り組む学生社長（先探人）」

（『日経MJ』2001年7月21日 9ページ）

「株式会社商店街ネットワーク」の社長に就任した木下斉氏（当時高校生）についての記事である。乙武氏の『五体不満足』を読んだことがきっかけで早稲田商店会のまちづくり活動に参加したことや、早稲田商店会長の安井氏による抜擢の経緯が語られている。

「商店会の試み 子供ら守れ「震災疎開」（防災力）」

（『朝日新聞』2002年1月18日 朝刊 3社会 37ページ）

早稲田の商店街と気仙沼の商工会議所の間で、大災害時にお年寄りや幼児らを一時的に疎開させられる仕組みを計画していることが記事となっている。また、早稲田で始まった「エコ・ステーション」が全国56箇所に取り入れられていることが伝えられている。

「東京、早稲田大学周辺商店連合会——地ビール人気で活性化（新人脈地脈）」

（『日経産業新聞』2003年4月14日 22ページ）

W商連が2002年から発売を開始した「早稲田地ビール」が好評であることが伝えられている。W商連会長が「目に見える形で成果が出たのは初めて」と語っている。

「早稲田大学周辺（東京都新宿区）——起業家の店次々と（トレンド特区）」

（『日経プラスワン』2003年11月22日 19ページ）

早稲田地域において脱サラリーマンの起業が増えているという記事である。早稲田の商店街などで立ち上げた「早稲田創業支援機構」が早稲田での起業を後押しした。

「生誕の地に『アトム通貨』 70店舗使用可能 東京・高田馬場など」

（『朝日新聞』2004年04月06日 夕刊 1社会 15ページ）

2004年4月7日からアトム通貨が流通開始となることを伝える記事である。

「[挑戦新話・安心づくり] 早稲田商店会 安井潤一郎さん54＝宮城」

（『読売新聞』2004年4月22日 東京朝刊 宮城3 32ページ）

早稲田商店会が中心となって開始した「震災疎開パッケージ」について、考案したきつ

かけやパッケージの仕組みが書かれている。

「参院選 若者を投票へ…あの手この手 学生に意識調査 『投票済み証』で割引」
（『読売新聞』 2004年7月10日 東京夕刊 タ2社 18ページ）

早稲田大学周辺の商店街が参院選投票日に「選挙セール」を実施することが紹介されている。対象店舗（約50店舗）で投票済み証を提示すると割引などを受けられるという取り組みである。

「コミュニティー——新潟中越地震の被災者支援、商店街ネット活躍（生活）」
（『日本経済新聞』 2004年11月11日 夕刊 17ページ）

新潟中越地震の被災者の一時疎開について取り上げた記事である。早稲田商店会考案の「震災疎開パッケージ」でできたネットワークが活かされていた。

「ここに注目：2年目迎えた『アトム通貨』 商品購買のきっかけに /東京」
（『毎日新聞』 2005年04月14日 地方版/東京 22ページ）

アトム通貨初年度である2004年度の成果がまとめられている。

「衆院選・比例東京 『サプライズ』当選に喜びジワリ 自民の名簿下位登載者たち」
（『読売新聞』 2005年9月13日 東京朝刊 都民 35ページ）

早稲田商店会長の安井氏が衆議院選挙に出馬し、当選するまでの経緯が書かれている。

「アトム通貨：運営3年 社会人ボランティアから運営引き継ぎ、支える早大生」
（『毎日新聞』 2006年4月27日 地方版/東京 27ページ）

社会人を中心に運営されていたアトム通貨事務局の運営を、学生スタッフのみで運営していくようになった経緯が書かれている。社会人スタッフが別のボランティア活動に参加するためにアトム通貨を去って存続の危機であったところを、学生が引き継いだことで運営を継続できた。

「早稲田商店会、各地の名産品販売、商業団体と連携、宅配便なし。」
（『日経MJ』 2006年6月19日 13ページ）

早稲田商店会が全国各地の商店会と築いたネットワークを活かして、各地の名産品を早稲田商店会店舗で販売する取り組みを始めた。また、エコ・ステーションと類似した取り組みが、2006年現在全国約80箇所で行われるようになったという記述がある。

「早大スイーツ、学生発で定着 お土産に好評 /東京都」

(『朝日新聞』 2009年01月10日 朝刊 東京都心・1地方 31ページ)

早稲田大学125周年記念事業に関わる女子学生と大学周辺の商店街が中心となって、早稲田のおみやげとして「杜の恋の物語」という菓子を開発した。出来上がった菓子は、まちづくり会社ワセダウェブによって販売された。

「早稲田（東京都新宿区）（上）集いの場、ジャン荘から学内カフェへ（学生街今むかし）」

(『日本経済新聞』 2012年05月14日 朝刊 23ページ)

かつて学生たちのコミュニケーションの場であった雀荘や、長時間たむろできる喫茶店が減少したという話がかかれており、早稲田大学広報課職員の「学生たちはキャンパスの外に出なくなっている」という発言が取り上げられている。

「早稲田（東京都新宿区）（下）地元と交流、お祭り気分で（学生街今むかし）」

(『日本経済新聞』 2012年05月28日 朝刊 19ページ)

南門商店街にある寺院「宝泉寺」の住職の思いが紹介されている。「古くからある早稲田の伝統と、今の学生たちの新しい発想が、早稲田の街の魅力と活力を生み出している。この街で生まれ育った早稲田のファンとしても、学生たちが様々な思い出をつくる手助けをしたい」と述べられている。

「おいしさで復興支援 気仙沼の戻りカツオなど販売 あすから早稲田かつお祭り /東京都」

(『朝日新聞』 2012年9月29日 朝刊 都・2地方 26ページ)

2012年に初めて開催された「早稲田かつお祭り」に関する記事である。イベント内容について具体的に触れている。

○参考資料 4 早稲田のまちづくりに関連する書籍・WEB ページ

<書籍>

- ◆早稲田いのちのまちづくり実行委員会『ゼロエミッションからのまちづくり ー早稲田商店街のビッグバン・ドキュメントー』、日報、1998

いのちのまちづくり実行委員会に参加しているメンバーが、それぞれの携わる取り組みに関して分担して執筆している。執筆者は商店主、行政職員、研究員、環境関連企業社員、学生など多岐にわたる。いのちのまちづくり実行委員会のメーリングリストに流れた文面をそのまま掲載している箇所もあり、当時どのようなふう意見のやりとりが行われていたかを知ることができる。

- ◆安井潤一郎『スーパーおやじの痛快まちづくり』、講談社、1999

早稲田いのちのまちづくり実行委員長を務めていた安井氏が執筆した本である。安井氏がどのようなきっかけで早稲田のまちづくりに関わるようになったかを知ることができる。また、出版時期の関係で『ゼロエミッションからのまちづくり ー早稲田商店街のビッグバン・ドキュメントー』では触れられていなかった「エコ・ステーション」に関する記述がある。

<WEB ページ>

- ◆ワセダ・カルチュラタン HP

(<http://www.geocities.jp/quartiejp/>)

桜井一郎氏が中心となって開始した団塊世代対象の自主講座「ワセダ・カルチュラタン」のホームページ。

- ◆特定非営利活動法人全国商店街まちづくり実行委員会 HP

(<http://www.m-shoutengai.com/>)

早稲田商店会が中心となって開始した「震災あんぜんパック」（「震災疎開パッケージ」から名称を変更）などを運営している NPO 法人のホームページ。安井潤一郎氏が理事長を務めている。

◆一般財団法人消防科学総合センター「防災まちづくり大賞表彰事例集 第 6 回受賞事例 (平成 13 年度)」

(http://www.isad.or.jp/cgi-bin/hp/index.cgi?ac1=IB01&ac2=h13jirei&Page=hpd_view)

2001 年の防災まちづくり大賞消防庁長官賞を受賞した「早稲田のまちの防災」の取り組みが紹介されている。

◆内閣府防災情報のページ「広報誌『ぼうさい』」

(<http://www.bousai.go.jp/kohou/kouhoubousai/>)

広報誌「防災」のバックナンバーが閲覧できる。平成 14 年 9 月号 (第 11 号) に、早稲田の街での防災の取り組みが平成 14 年度防災功労者内閣総理大臣表彰を受賞したことが掲載されている。

◆内閣府「平成 17 年版防災白書」

(<http://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/h17/index.htm>)

第 1 部のコラム図で「震災疎開パッケージ」が紹介されている。

◆中小企業庁「がんばる商店街 77 選」

(<http://www.chusho.meti.go.jp/shogyo/shogyo/shoutengai77sen/index.htm>)

中小企業庁が 2006 年に全国の商店街の先進的な取り組みを紹介したもの。W 商連の取り組みが「アイディア商店街」として紹介されている。

○参考資料 5 年表

早稲田のまちづくり年表	
1989	・米国西海岸の大学を視察（早大関係者、商店会長など）
1990	・大隈通り商店街で「うずき祭」を実施
1992	・団塊世代対象の自主講座「ワセダカルチュラタン」を開始
1996	・第1回エコ・サマーフェスティバル・イン早稲田の開催 ・早稲田いのちのまちづくり実行委員会の発足
1997	・文部大臣に対して教科書への再生紙全面使用を要請
1998	・エコステーション1号館設置 ・早稲田いのちのまちづくりの活動をまとめた『ゼロエミッションからのまちづくり 早稲田商店街のビッグバン・ドキュメント』を出版
1999	・第一回エイジングメッセの開催 ・「第一回全国リサイクル商店街サミット」を早稲田で開催
2000	・「早稲田地球感謝祭 2000」の開催（「エコ・サマーフェスティバル・イン早稲田」と「エイジングメッセ」はこれ以降同時開催） ・まちづくり会社「ワセダウェーブ」の設立 ・「株式会社商店街ネットワーク」の設立 ・商店街ネットワーク社長の木下斉氏（当時高校生）が「IT革命」で流行語大賞を受賞
2001	・早稲田商店会防災企画として「第6回防災まちづくり大賞消防庁長官賞」を受賞 ・「早稲田創業支援機構」の設立
2002	・早稲田商店会防災企画として「平成14年度防災功労者内閣総理大臣表彰」を受賞 ・W商連が「地ビール早稲田」の販売を開始
2003	・早稲田商店会が中心となって「震災疎開パッケージ」を開始
2004	・地域通貨「アトム通貨」流通開始
2005	・元早稲田商店会長の安井潤一郎氏が衆議院議員となる
2006	・中小企業庁選定の「がんばる商店街77選」にW商連が掲載される ・「ワセダ・カルチュラタン」の流れを汲んだNPO法人「団塊のノーブレス・オブリージュ」が設立される
2007	・早稲田みやげの菓子として「杜の恋の物語」の販売を開始
2008	・「全国リサイクル商店街サミット」の名称を「全国商店街まちづくりサミット」に変更
2012	・「早稲田かつお祭り」を開始